

## ドストエフスキイ研究会便り(13)

### カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々 —

#### (6). スメルジャコフへの鎮魂歌

はじめに

今回の第6章で本論「カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々 —」は取り敢えず最終回となる。この作品の基本的構成については何度か検討してきたが、最後に改めてその全体像について、本論の視点からまとめてみよう。今まで取り組んできた様々なテーマを確認し、更に今回取り組むテーマもここに提示しておきたい。

『カラマーゾフの兄弟』とは「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマであり、その魂の「成長史」である。この大テーマの下に具体的に展開するのは、何重もの「罪なくして涙する幼な子」たちを巡るドラマだ。「罪なくして涙する幼な子」たちの存在。それはまず「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」と共に、イワンが凝視する世界の抱える現実である。だがそもそもこの現実とは、イワンを含む四人の兄弟たちが放り込まれた運命に他ならない。幼くして母に死なれ、父親からは「忘れ去られ、棄て去られた」兄弟たち。彼らは魂の真の母と父を、そして真の故郷を求めてそれぞれの人生の旅を続けるのだ。そしてこれらカラマーゾフ家の「罪なくして涙する幼な子」たちのドラマは、やがて故郷家畜追込町での「父親殺し」という懼るべきクライマックスに向けて収束してゆく(我々は前回第5章<sup>[5]</sup>で、フォードルの殺害とゾシマ長老の死とを、作品の二つの「負の核」「負の駆動力」と呼んだ)。その過程で浮かび上がるのが、この作品の最深奥に存在する二人の「罪なくして涙する幼な子」たち、イリュエシ少年とスメルジャコフの生と死である。理不尽で醜悪な運命の内に投げ込まれたこれら二人が辿る悲劇的生と悪魔的復讐劇、そしてその果てに彼らを待つ苦悩と死。その死を超えて、彼らは「永遠の生命」の内に摂取されるのか。読者はこの問題の前に立たされるのだ。前回我々は、イリュエシ少年の死と復活の問題について考えた。最終回はスメルジャコフである。この作品が持つ問題の複雑さと困難さは、この存在が「罪なくして涙する幼な子」としての生を何重にも負わされたところにあると思われるのだが、第一回目からの考察を踏まえ、今回は彼の死と復活について正面から考えたい。

ところで我々は、このスメルジャコフをこの作品の「ブラック・ホール」とも呼んで、今まで彼とマリア、イワン、ドミートリイ、そしてアリョーシャとの関係を中心に、様々な問題を検討してきた。その中から強く浮かび上がってきたのは、スメルジャコフやイリュエシ少年が突きつける問題を正面から受け止め、それらに対して究極の解答を与えるべく生きるアリョーシャの存在である。この中性的で生彩がないとされる物静かな青年、生来の信と愛の人の内に認められるのは、言葉の真の意味における「強さ」である。アリ

ヨーシャとは、前回の第4章でイリュージョン少年のドラマに沿って確認したように、イエスとゾシマ長老の遺訓を受け、「罪なくして涙する幼な子」たちの不幸と正面から向き合う「実行的な愛」の人であり、彼らの苦悩に寄り添い、彼らを運命の悲劇的悪魔的陥穽の中から「光」の中に導き出すべく生きる存在なのだ。

かくして「神と不死」の探求、「罪なくして涙する幼な子」、そして「父親殺し」という三つのテーマに、それらを「実行的な愛」のテーマが受け止める形で作品の基本的骨格・問題軸が構成され、更にはカラマーゾフ家の人々にゾシマ長老やグルーシェニカやカチェリーナやリーザ、そしてスメルジャコフの育ての親グレゴリー夫婦や婚約者マリアらが加わり、モスクワと家畜追込町を舞台として展開する「<sup>パノラマ</sup>全景大観図」「<sup>コレスボンダンス</sup>万物照応」、あるいは「<sup>ヴェルテツ</sup>聖と俗」の二重構造のドラマ、それがカラマーゾフの世界だと言えるであろう。

ところでアリョーシャとスメルジャコフ、これら二人の異母兄弟の間には具体的に如何なる交流があったのか。このことについて、作者ドストエフスキイが直接記すことはごく少ない。このため多くの読者と評者が、アリョーシャはスメルジャコフにだけは心を向けなかったとして、上に記したような批判と共に、彼の「実行的な愛」の限界性を指摘する。だが作家ドストエフスキイの作品構成力と、それに基づく具体的叙述上の戦略は、見事に二人の間の見えざるドラマを刻み上げている。この二人の間の見えざる対話、言い換えれば「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフと「実行的な愛」の人アリョーシャとの関係こそ、『カラマーゾフの兄弟』が我々読者に読み取ることを要求する最大の難問の一つであり、またこの作品における最も重要な対立軸・問題軸であると言えよう。今まで五回の下準備を基に、今回は主にこの問題を順次検討してゆき、二人の関係を明確に浮かび上がらせ、スメルジャコフの死を超えた「永遠の生命」について考えたいと思う。まずはスメルジャコフが残した遺書の検討から始めよう。

このスメルジャコフ論は、拙著『カラマーゾフの兄弟論—砕かれし魂の記録—』（河合文化教育研究所、2016）において、既に基本的には展開している。本論では改めて初回からこの最終回第6章に至るまで、「罪なくして涙する幼な子」の問題と「父親殺し」の問題とを主たる縦糸とし、カラマーゾフ家の兄弟四人の相互関係を丁寧に解きほぐしつつ、この「罪なくして涙する幼な子」の極北に存在するスメルジャコフ像と、「実行的な愛」の人アリョーシャ像とを浮かび上がらせるよう試みた。関心のある方は拙著も併せてお読み頂ければ、ドストエフスキイのキリスト教理解、殊に聖書テキストの理解について、またその流れの中でアリョーシャが生きる「実行的な愛」と、それが拠って来たるゾシマ長老やシリアの聖イサクの思想の核心と連関を理解する上でも、何らかの参考となるのではないかと思われる。

## 第6章. スメルジャコフへの鎮魂歌 [第十一章10より]

目次	[ページ]
1. スメルジャコフの遺書 — 孤絶の中で向き合ったもの —	3～7
2. 「絶滅させる」を巡って(1) — 「怒りと裁きの神」の前で —	7～13
3. 「絶滅させる」を巡って(2) — 主人公たちのドラマの中で —	13～22
4. スメルジャコフが向き合った「懼るべき」「活ける神」 — 怒りと裁きの神、愛と救しの神 —	22～37
5. アリョーシャの「ゾシマ伝」 — 兄スメルジャコフへの鎮魂歌 —	37～55

### 1. スメルジャコフの遺書 — 孤絶の中で向き合ったもの —

#### 残された遺書

三度目で最後の訪問を終えてイワンが去った後、サモワールを片付けるべく部屋に入ったマリアが見出したのは、壁に首を吊ったスメルジャコフであった。彼女は直ちにアリョーシャの許に駆けつける。この事情は初回、第1章の冒頭で見た通りである。二人がとって返した時、スメルジャコフはまだ「壁にぶら下がった」ままで、傍らのテーブルの上には短い遺書が残されていた。

「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」

(十一 10)

イワンが去った後、恐らくスメルジャコフはこれを急ぎ書き記したのであろう。極めて短い、謎のような文面である。この遺書が持つ意味を、今までの五回の考察を基にして、どこまで明白に浮かび上がらせることが出来るか、これが今回の主な課題の一つである。

「父親殺し」という血の一線を踏み越えたスメルジャコフとイワン。彼らが直ちに投げ込まれたのは懼るべき「悪業への懲罰」であった。ゾシマ長老の予言通り、二人の罪人の良心に神の裁きが臨んだのだ。イワンが「神に見られる」自分を発見するまでのドラマについては先に見た(第3章、「研究会便り(10)」)。だがスメルジャコフに臨んだのは、如何なる神であったのか。この問題についても、我々は既に第3章で検討したのだが<sup>[4]</sup>、本章では彼の遺書と向き合い、彼が辿ったドラマももう一度確認し直すことで、改めてアプローチを試みよう。また「罪なくして涙する幼な子」としての彼が生きた生とは、結局何であったのか。その死とは、如何なる死であったのか。これらの問題も彼が残した遺書と共に、またアリョーシャとの関係で、改めて正面から考えねばならない。

### 遺書が示すもの

スメルジャコフの遺書を検討する前に、瞬時イワンに目を向けておこう。第3章〔5〕で見たように、父親殺しの罪を自覚させられると共に、「神に見られる」自分を発見したイワンの心を占めたのは、最早目の前のスメルジャコフではなかった。彼の神体験とは、裁きの神との直面であると共に、世の裁きとの直面でもあり、そこに下男スメルジャコフが入る余地などはなかったのだ。この時のイワンにとってスメルジャコフとは、己と共に神の裁きの場に進み出るべき「罪人」というよりは、彼が盗み出した三千ルーブリと共に、法廷に提出されるべき「証拠物件」でしかなかったのである（十一8）。しかもイワンはこの下男が、「絞首台」への道を歩むことを予感していたにもかかわらず（十一10）、その場を立ち去ってしまったのであった。「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」に続き、我々がイワンの「兄弟殺し」と呼ぶ所以である。イワンが歩むべき「十字架」への道は、なお長く険しい（第3章〔5〕・〔6〕）。

他方、イワンとの最後の会話が示すのは、スメルジャコフには翌日の法廷に出頭する意志など毛頭もないということである。「地質学的変動」の人神思想によって自分を父親殺しに導いた若旦那イワンに対し、恨みや怒りをぶつけようとの意図もない。更に自分の惨めで醜悪な人生の根となった父親フォードルに対して、憎悪や呪いを表現することも一切ない。また逆に、自分が殺害した父に対する憐みの心が覗われることもない。

スメルジャコフのイワンに対する最後の言葉は一言、「さようなら！」であった（十一8）。この一語で彼はイワンばかりか、恐らくこの世の一切と関係を断ち、別れを告げたのだ。その直後に書かれた遺書。「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」——ここに重ねて用いられた「己<sup>おのれ</sup>」、つまり「己自身の意志と好み」と「己の命」という表現に注目すべきであろう。これら「己」の重複が表わすものとは、自分自身の死を選び取るのは他ならぬ自分であるとの、また自分の死に他人は一切関係なく、また介入も許さないとの、絶対的孤絶への断固たる意志と言うべきものだ。ここにいるのは「己」への絶対的固執、否、この世における最後の強烈な自己主張を宣言するスメルジャコフであろう。

第一回目から確認してきたように（第1章〔3〕）、スメルジャコフにとっての生とは、侮辱的で忌まわしいもの以外の何ものでもなく、それは憎悪と呪いの対象でしかなかった。いつの間にか人が呼ぶ「パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ」という名前からして侮辱的と言う外なく、彼にとりこの世における己の存在の必然性・唯一性を知ることは至難のことであり、彼は一人家畜追込町の片隅から世に白い眼を剥く孤独な「観照者」であり続けたのだ（三6）。この下男かつ異母兄弟との交流の末に、若旦那イワンが嫌悪感と共に見て取ったのは、相手の奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」、「傷ついた自尊心」であった（五6）。「己自身の意志と好みによって」——この遺書の冒頭から聴き取るべきは、スメルジャコフの「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」、そこから発せられる「己」への絶対的固執の

叫びと言うべきものであろう。「己自身の意志」に付け加えられた「好み」。この語の内には彼の「傷ついた自尊心」の最後の疼きと訴えが聴き取られると言えよう。

だがこの叫びをただ単に、世に対する憎悪や呪いの表現だと取ることは誤りであろう。彼が遺書の最後に付した「誰にも罪を負わせぬため」—— これはイワンやドミートリイに対する皮肉や嘲笑などではない。また彼らに対する憐憫を表わすものでも、まして彼らに対する謝罪や愛情の表現でもまずないだろう。彼ら異母兄弟とは一切関係なく、スメルジャコフは父親殺しの罪と一人向き合い、その罪を己の罪として一人贖おうとしているのだ。父親殺しから二か月もが経って、漸く自らの罪を悟るに至った若旦那イワンにも、そして明日無実の罪を着せられようとしているもう一人の若旦那ドミートリイにも、父親殺しの罪は一切係わりのないこと、罪はただ己一人に帰せられるべきものであることを、彼は宣言していると考えべきであろう。「さようなら!」。他者を一切排し、絶対の孤絶に立つ彼にとり、最早地上世界の人間もその裁きも一切関係ないのだ。

「己の命を絶滅させる」—— これが遺書の核心であろう。スメルジャコフが今や一人向き合うのは裁きの神であり、彼は自分と神との間に、何ものも、また誰一人として介在することを許さず、この神の前で己の罪を認め、この神の裁きに己の裁きを重ね、己の罪を贖うべく、「己の命を絶滅させる」ことを宣言しているのだ。しかも「己自身の意志と好みによって」—— 裁きはただ「神」の手の内ではなく、「己」の手の内にもあると言うのである。神による「聖絶」と重ねられた、いわば「自己聖絶」の宣言だと言えよう。「絶滅させる」という動詞も、只ならぬ強烈な響きを持つ。この動詞を始めとして、スメルジャコフの遺書については、なお様々な角度から繰り返し考える必要があるのだが、今は取り敢えず、絶対的孤絶への意志を表明し、絶対的裁きの神の前で一人、己の罪を己自ら処罰して贖い、己の命を己自ら清算しようとするスメルジャコフの姿を認めておこう。その姿が投げる孤高の影は毅然としていて潔い。だがここにはなお「傷ついた自尊心」の残響が<sup>こだま</sup> 残し、悲劇的な色彩が少なからず漂う。

### マリアに語ったこと

次に我々は、スメルジャコフと神について、そして彼が遺書に記した「己の命を絶滅させる」という尋常ならざる表現について、聖書の磁場の内で考察しなければならない。

だがその前にスメルジャコフとマリアとの逢瀬の場に戻り、そこで彼が語った言葉をもう一度見ておこう。繰り返し確認してきたように（第1章<sup>[5]</sup>、第3章<sup>[4]</sup>（2）、第4章<sup>[5]</sup>、第5章<sup>[5]</sup>等々）、ここで彼はマリアに対し、既に自殺のことを口にしているのだ。しかもそれは極めて特異な表現による、極めて衝撃的な内容である。つまり理不尽で醜悪な己の運命を呪うスメルジャコフは、父親殺害の前日、自分を慕うマリアに向かい、育ての親グレゴリーに呪詛の言葉を浴びせ、続いて外国人と共にロシア国民と祖国を嘲笑し、更には異母兄弟のイワンとドミートリイについても激しい非難の言葉を吐き、遂には次のような驚くべき言葉を発しているのである。

「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五2)

己の生を呪い否定する、これ以上に激しく痛ましい言葉があろうか。スメルジャコフが如何に只ならぬ深い孤独の内に生き、この世の生を苦しみとしていたか、そしてその生を如何に激しく憎悪し呪っていたかが、この言葉から明らかとなる。しかも注意すべきことに、この言葉は旧約のヨブ気を踏まえ、更には福音書のイエス・キリストの言葉を向こうに置いて発せられた言葉と考えられるのだ。

「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」  
(マルコ十四 21)

千九百年を隔てたスメルジャコフとヨブの叫びとの、殊にイエス・キリストの言葉との響き合いについて、その具体的な状況や内容についての検討は既にしてある(第1章5、「研究会便り(8)」)。改めて驚かされるのは、彼の自己抹殺への願望の強烈さである。片隅から一人、「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を抱え、世に白い眼を向け続けたスメルジャコフ。この青年が父親殺害の前日に表明したこととは、可能ならば自分は母の胎内に入る内に「自殺」してしまいたかった、自らの生そのものを無に帰してしまいたかったとの願望であり、しかもこの時彼の言葉は神に向かい、「神の子」イエス・キリストに向かい発せられたものであったことを、改めて確認する必要があるだろう。

己が投げ込まれた理不尽で醜悪な運命に対する呪詛の言葉は、旧約のヨブ記にも強烈なものが存在することを改めて確認し、イエスの言葉との関係を考えておこう。

「何とて我は胎より死にて出ざりしや。

何とて胎より出し時に氣息たえざりしや」(ヨブ記三 11)

フョードルから「ジェズイット」とまで呼ばれるスメルジャコフが、このヨブの呪いを知らなかったということはまずあり得ない。だが彼が己の運命に対する呪いを、母の胎内における自殺というイメージにまで強めて結晶させたのは、恐らくマタイ福音書のイエスの言葉を向こうに置いてのことだと考えられる。ヨブの言葉が己の運命への、まずは「嘆き」に向かう内向きのものであるのに対し、イエスのそれは外に向かい、彼が信頼し愛を傾けた弟子たちの裏切りに対する強烈な「対決」の姿勢を特徴とする。父親殺しに向かうスメルジ

ヤコフの姿勢とは、運命に対する復讐の刃を、その運命を司る神に対して、そしてその「神の子」キリストに対して「柄をも通れ」とばかりにぶつけようとするものである。彼の言葉は、「対決」の姿勢の激しさの点で、ヨブの嘆きの言葉よりも、直接イエスの言葉と呼応するものと考えられるべきであろう。いずれにせよスメルジャコフが、旧約新訳の如何なる箇所に目を向け、如何なる思索をする青年であったかが、これらから窺い知られよう。

さてマリアに向かいスメルジャコフが表明した自殺への願望と、それから二か月後に彼が実際に踏み込んだ自殺。これらの間には一体何があったのか。彼は如何なる神と、あるいはイエス・キリストと出会ったのか——これらこそ『カラマーゾフの兄弟』において我々読者が、作者ドストエフスキイから読み取ることを求められた最大の謎であり、課題であることを念頭に置いて、先に進むことにしよう。

## 2. 「絶滅させる」を巡って — 「怒りと裁きの神」の前で —

### スメルジャコフの聖書知識

スメルジャコフが遺書に記した「己の命を絶滅させる」。この「絶滅させる」という異様な響きを持つ語について検討する前に、スメルジャコフに関わる宗教的聖書の磁場について確認し直しておこう。我々は第一回目以来、スメルジャコフの内から顕われ出る様々な異様さの中に、その感性の病的なほどの豊かさと聖書知識の深さ、そして宗教的形而上学的思索力の高さを認め注目してきた（第1章、第2章）。例えば、猫を殺害しては一人密かに執り行っていた葬式遊び。ここで少年スメルジャコフは、まずは自ら猫を絞殺した後に、今度は自らが司祭となり、哀れな猫のために葬儀を執り行い、悲痛な葬送の歌をうたうという、異様で痛ましい宗教儀式を一人で創り出していた。この時少年は自らを、猫の生死を支配する万能の主としていたのである。またこの少年は、グレゴリーを師とする「寺子屋」での学習においても、光の始原について創世記の叙述が含む矛盾を、驚くべき鋭利さと皮肉とを以って指摘したのであった。それ以外にも、食べ物に対して彼が示した異常とも言うべき潔癖さ、極度の人間嫌いと女性嫌い、そして頻繁に襲われる癲癇発作等々。これらのエピソードの内に我々が認めたのは、彼の不幸な出生とその後の運命が彼の内に育んだ病的とも言えるほどに鋭敏で繊細な感性と、それに根差す強靱な宗教的形而上学的思索力であった。そこからなされる思索は、人間と世界とその歴史、そして創造主たる神にまで、更には十字架上で磔殺されるまで「神の国」を伝えたイエス・キリストにも向かう本質的思索と言うべきものであった。彼の思索を根底で貫くものとは、自らが万物の始

原とその正否を測り、また創造主の業の行方を終局まで見極め、可能であればそれら一切を自らが司ろうとの強固たる意思であると考えられた（第2章<sup>[2]</sup>、「研究会便り（9）」）。

注意すべきことは、彼の宗教的形而上学的思索力が、殊に旧約新約の両世界とそれらが抱える問題を巡って展開していたように見えることである。創世記における光の始原の問題も然り、その棄教者論も然り、十字架を前にしたイエスに対する叛逆の言葉も然り、およそスメルジャコフの誕生から死に至るまでの様々なエピソードで、旧約新約聖書を中心とした宗教的問題に関わりのないものはまずないと言ってよいであろう。裸同然で家畜追込町を彷徨する宗教的痴愚スメルジャシチャヤを母とし、聖書を種に瀆神的道化を繰り返すフォードルを父として持つスメルジャコフ。この存在にまつわる深い聖書的磁場に目を向け、それを正面から受け止めない限り、彼の言葉と生死が指し示すもの、またその悲劇性と悪魔性の十全な理解はまず不可能なのだ。

更に付け加えると、自らの赤ん坊の死とスメルジャコフの誕生とを同時に体験させられた養父グレゴリーイが、この「自然界の混乱」を前にして取り組んだのは旧約のヨブ記であり、また『殉教者列伝』であり、そして『シリアの聖イサクの苦行説教集』であった。上に記したようにフォードルもまた、旧約新約聖書をその瀆神的道化の道具として駆使する存在である（二二・六・八、「研究会便り（4）」）。イワンやアリョーシャは言うまでもない。カラマーゾフ家の人間にとって聖書世界とは、彼らの思索と行動とが拠って立つ、いわば「ホーム・グラウンド」なのだ。スメルジャコフもまた、このカラマーゾフ家において、二人の「父」の下で育った「ロシアの小僧っ子」であり、たとえ東の間とは言え、また不肖の弟子とは言え、彼ら二人の「父」の「寺子屋」で薫陶を受けた生徒だったことも忘れてはならない（第2章<sup>[2]</sup>）。イワンとスメルジャコフとの最初の会話の話題が、創世記における光の始原の問題であったことも偶然ではないだろう（五六、第2章<sup>[6]</sup>）。

「己の命を絶滅させる」—— 彼が遺書に記したこの「絶滅させる」という語も、以上のような文脈の内に捉えられる時、恐らく彼が旧約聖書から採ったものであり、彼自身の存在理解と神理解に深く関わる可能性が高いと考えられる。以下で旧約聖書における「絶滅させる」とその同類の動詞群について、少々煩わしいが最小限の検討をすることで、このことを確認しておこう。

### 旧約聖書の「聖絶」、「絶滅させる」と同類の動詞群

「絶滅させる」。これは「絶滅させる」という完了体の動詞と対になる不完了体の動詞であり、「壊滅させる」(完)「壊滅させる」(不完)、「根絶させる」(完)「根絶させる」(不完)、更に「撲滅させる」(完)「撲滅させる」(不完)などと共に、怒りと裁きの神エホバ自らが、あるいはエホバがユダヤの王に命じ、民族の敵のみならず、エホバから心を逸らし離反したユダヤの民をも絶滅させ、滅ぼし尽くし、無に帰さしめるという極めて旧約的終末論的色彩の濃い動詞群に属するものである。その他の仲間の動詞も幾つか挙げておこう。「打ち砕く」(完)「打ち砕く」(不完)、「滅ぼす」(完)「滅ぼす」(不完)、「滅亡する」

(完)「滅亡する」(不完)、「粉碎する」(不完)、「清算する」(完)、「枯渇する」(完)等々・・・  
これらの動詞群が指す概念は、まとめて「聖絶」とも言われる。

ロシア語の動詞には大部分「完了体」と「不完了体」が対  
で存在する。前者は動作の全体が視野に置かれ、完了や結  
果に重点が置かれるのに対し、後者は動作の過程や試みに  
重点が置かれる。本論ではこれらの動詞の訳語は、基本的  
に「完了体」も「不完了体」も同じにしたが(表記は略し  
て(完)と(不完)とした)、それぞれが用いられる文脈  
の中では、例えば「絶滅させてしまう」(完)、「絶滅させる」  
(不完)のように、どちらかの意味がはっきりと出るよう  
に訳した場合もある。

これらの動詞の使用例は旧約聖書全篇を通じて枚挙にいとまない。以下では神の裁きと  
終末を表わすことで有名な「ノアの箱舟」のエピソードと、モーゼの後継者たるヨシュア  
王に下された「聖絶」の神命と、預言者エレミア個人への召命の場面、これら典型的な三  
か所を取り上げ、「絶滅させる」とその仲間の動詞群が旧約聖書を、そして「怒りと裁き  
の神」を如何に特徴づけるものであるか、確認をしておこう。更にその後で、スメルジャ  
コフとの関係で「バラムの驢馬」の物語を取り上げるが、ここにおいても背後で決定的な  
役割を持つのは「聖絶」の概念である。

以下の訳はロシア聖書協会『旧約聖書』(2011)、日本聖書協会  
『舊新約聖書』(1967)による。なお「絶滅させる」とその同類  
の動詞群の和訳は様々に可能であり、一つに固定することは  
不可能である。本文で紹介した動詞群も似たような日本語訳  
で、少々煩わしい。以下の引用文では日本聖書協会の文語訳  
を基準とし、それらに下線をつけ、カッコ内に順次、上の本  
文で説明した動詞のルビ付きの訳語を対応させておくので、  
参考にして頂きたい。

「神ノアに言たまひけるは、諸の人の末期わが前に近づけり。其は彼等のために暴虐  
世にみつればなり。視よ我、彼等を世と共に剪滅さん」  
(創世記六1-3//順に「壊滅させる」「清算する」)

「ヨシュアこれらの王の一切の邑々およびその諸王を取り、刃をもてこれを撃て、  
儘く滅ぼせり、エホバの僕モーゼの命じたるがごとし」

(ヨシュア記十一 12// 順に「絶滅させる」「壊滅させる」)

「みよ我<sup>われ</sup>けふ汝<sup>なんぢ</sup>を萬民<sup>ばんみん</sup>のうへと萬国<sup>ばんこく</sup>のうへにたて、汝<sup>なんぢ</sup>をして或<sup>あるひ</sup>は拔<sup>ぬ</sup>き、或<sup>あるひ</sup>は毀<sup>こぼ</sup>ち、  
或<sup>あるひ</sup>は滅<sup>ほろぼ</sup>し、或<sup>あるひ</sup>は覆<sup>たふ</sup>し、或<sup>あるひ</sup>は建<sup>た</sup>て、或<sup>あるひ</sup>は植<sup>うゑ</sup>しめん」

(エレミア記一 10// 順に「撲滅させる」「根絶させる」「滅ぼす」「粉碎する」)

「諸の人」「一切の邑々」「萬民」「萬国およびその諸王」、つまり地上の被造物一切が、エホバ神の怒りと裁きの前に滅ぼし尽くされ、無に帰さしめられるのだ——創世記における神の創造、光の始原を問題とし、更には母の胎内での自殺さえ口にするスメルジャコフが、創造・始原とは逆に、旧約のエホバ神による徹底的裁きと終末、「聖絶」についても思いを馳せ、これら動詞群を自らの語彙と思索の範疇に入れていた可能性は少なくないだろう。彼が遺書に記した「己の命を絶滅させる」、この表現が旧約聖書のエホバによる「聖絶」と連なることも、まず疑いの余地がないだろう。スメルジャコフと旧約の「聖絶」の概念。以下にこの結びつきを、民数記の「バラムの驢馬」を介して確認しておこう。筆者が何気なくしたように見える言及の内には、実は周到な計算が含まれていると考えられるのだ。

### スメルジャコフの二人の父、そして聖書

「場違いな会合」の後、カラマーゾフ家における夕食の席のことである。この場が、その日ゾシマ長老の庵室で持たれた「場違いな会合」に劣らず、如何に聖書的话题に満ちたものであるかは驚くべきものがある。グレゴリーが持ち出した殉教者のエピソードを受けて、突然スメルジャコフが展開したのは棄教者論であった(三七)。この重要性については第2章で詳しく見てある(「研究会便り(9) [4]」)。筆者はこのエピソードの紹介にあたり、「突如バラムの驢馬が口を開いた」として、スメルジャコフを旧約の民数記に登場するバラムの驢馬と重ねるのである(二十二 21-35)。先に見た三つの「聖絶」の例と同じく、このエピソードもまた、エホバ神の「聖絶」を背景としない限り、驢馬の持つ役割も意味も光ってはこないであろう。以下に「バラムの驢馬・スメルジャコフ」について見てみよう。

### 民数記のバラムの驢馬

民数記の中盤(十一-二十章)。ここで語られるのは、ユダヤ民族をエジプトから脱出させ、彼らを率いてカナンを目指すモーゼが、その後四十年間にわたり続けた荒野の放浪についてである。この放浪とは、モーゼが突き当たった二つの敵との闘いであった。一つは外なる敵、すなわち旅の行く手を阻む様々な異民族との闘いであり、もう一つは内なる敵、つまり旅の苦しさに不平をこぼし、エジプトからの脱出自体を後悔するユダヤの民の、モーゼとエホバ神からの離反との闘いである。この両者との戦いにおいて、カナンの地に向けてモーゼを導くエホバ神は、外部の敵をも内部の敵をも共に容赦なく「滅ぼし尽くし」「絶滅させて」ゆく。「聖絶」である。

エホバによる「聖絶」の闘い。我々のバラムの驢馬のエピソードは、大きくはこの流れの中で起こる。イスラエルがいよいよヨルダン川東岸の地モアブに至ろうとする時のことだ（二十二章以降）。これを恐れたモアブの王バラクは、霊能者とも占い師とも予言者とも言われるバラムに、イスラエルに対し「呪い」をかけることを依頼する。ところがバラムに対して下ったのは、なんとイスラエルの神エホバからの託宣であり、バラク王の意向とは逆に、イスラエルを「祝福」せよとの命であった。この第一の宣託を始めとして、民数記が四度にわたって伝えるのはバラムに対するエホバ神の宣託、イスラエルの敵に対する激しい怒りと裁きの宣告である。自らが異民族に属するバラムが伝えねばならないのは、イスラエルの民に対する祝福と、エホバ神による異民族の情け容赦のない「聖絶」の意志なのだ——エホバを神とするイスラエルの民によって「獲物が喰らい尽くされ」、「掻き殺された者たちの血が飲み干される」であろう（第二の託宣、二十三 24）。「諸国民は喰らい尽くされ、彼らの骨は粉々に砕かれ、矢で刺し通される」であろう（第三の託宣、二十四 17）。そして「ヤコブは彼らの敵を支配し、生き残りの者を町から滅ぼし尽くす」であろう。そして彼らは「永遠の滅びに至る」であろう（第四の託宣、二十四 19・20・24）。これらは皆、先に見た三つの旧約聖書における「聖絶」の表現そのものである。

バラムは当初、バラク王とエホバ神との間で自らの立場を決めかねていた。バラムはイスラエルの民ではないからだ。しかし彼は普遍的立場に立つ霊能者・占い師・予言者として、この時自分に絶対的と思われる宣託を下したエホバ神に従うことが、自らの取るべき道であることも分かっていた。なお迷いの完全には晴れぬまま、バラムはバラク王の再度の要請に応え、王の許に向かう。

バラムの驢馬の登場はここからである。バラク王の許に向かう道の途上、なぜかバラムの乗った驢馬がまずは正道を逸れ、次には隘路の壁に主人バラムの片足を押し付け、遂には驢馬自身が狭い場所にしゃがみこんでしまう。怒ったバラムは、これらの三度とも杖で驢馬を打ちすえる。すると三度目に、驢馬は口を開いて言うのだった。「一体私が何をしたというので、あなたは私を三度も打つのですか」（二十二 28）。驢馬との応対の最中である。突如バラムの眼が啓かれる。その眼に映ったのは、エホバ神の使いが抜き身の剣を手に、道に立ち塞がる姿であった。この姿が最初から驢馬には見えていたのだ。バラムの心は定まる。エホバ神の託宣を、そのままバラク王に伝えねばならない……

### バラムの驢馬とスメルジャコフ

カラマーゾフ家の夕食の席。棄教者論を語り出したスメルジャコフを指し、筆者が「突如バラムの驢馬が口を開いた」と表現したこと。ここにそう深い意味はないと言うことも出来よう。と言うのも筆者はその直前スメルジャコフについて記し、彼が日頃余計な口は一切きかず、何年もの間ひたすら「印象」を積み重ねてきた「観照者」であるとしているからだ（三六、第2章、「研究会便り（9）[\[3\]](#)」）。逆にスメルジャコフとバラムの驢馬について、様々な深読みの可能性もあるだろう。ここでは我々は「聖絶」の概念に焦点を絞り、

そこからこの話を今までの叙述の線上に繋げておこう。

民数記において、バラムの眼をエホバ神に対して最終的に啓かせたのは、他ならぬ彼の驢馬であった。驢馬こそが裸の眼で、エホバ神とその「聖絶」の絶対至上性を正面から見据えていたのである。ここから家畜追込町における我々の物語を見るとどうなるか。父親殺しの直後から「悪業への懲罰」に曝され、裁きの神と正面から直面させられたスメルジャコフは、イワンとの三度にわたる対決の末に、この若旦那の眼を覆っていた「懼れ」と「夢」と「幻」の帳とぼりを除かせ、その眼を父親殺しの罪に対して、そして神に対して啓かせるであろう（十一8、第3章4、本章4）。つまりイワンはバラムであり、スメルジャコフはバラムの驢馬なのだ。ここにこの旧約エピソードの逆説的な象徴性があると言えよう。

だがスメルジャコフという存在を、裸の眼で神を見つめ、バラム・イワンの眼を神に対して啓かせた「義しき」忠実な従者たる驢馬であると結論づけるとしたら、それは余りにもナイーブな見方ということになるだろう。バラムの驢馬・スメルジャコフの生と死が現実を持つ意味は、このような単純な対比で汲み尽くされるものではない。むしろこの対比を逆方向に百八十度回転させたところ、つまりスメルジャコフの悪魔性を十全に受け止めたところに浮かび上がるものであり、そこにこそ深い逆説性が浮かび上がると見るべきであろう。

先に見たように、バラムの驢馬・スメルジャコフが遺書に記したのは、己の罪ゆえに、己の命を神の「聖絶」に曝すという意味であった。この驢馬は、己が投げ込まれた理不尽で醜悪な運命ゆえに、主人のバラムと共に、神に対して意図的に眼を閉ざし、遂には「父親殺し」を以って神に復讐を果たしたのである。この血の一線を踏み越えた後に初めて、我々のバラムの驢馬・スメルジャコフは、「悪業への懲罰」の現前により、その頑なに閉じた眼を啓かれ、己の罪を贖うべく「己の命を絶滅させる」に至ったのである。そればかりでない。事は更に複雑である。先に見たように、またこれからも見てゆくように、この驢馬は己の罪に対する裁きが、「神」の手の内にあるものとすると同時に、なお「己」の手の内にもあると宣言をしているのだ。神による「聖絶」と重ねられた、いわば「自己聖絶」の宣言である。ここにあるのは単直線的な視野の内には収まり切れない意味の広がりとは複雑さである。つまりここには「罪なくして涙する幼な子」の運命を与えられたバラムの驢馬・スメルジャコフの複雑に屈折した心、その内で疼き続ける「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の問題が存在するのだ。

ドストエフスキイは旧約世界を超えて、スメルジャコフを更に広く複雑な聖書的象徴体系の内に組み込んでいると考えるべきであろう。本章の目標は、この複雑な象徴性を解きほぐし、スメルジャコフの内面の理解と共に、彼が直面させられた神について、また彼の自死の意味について、出来るだけ正確に理解するよう努めることである。そのために以下では、彼が遺書に用いた「絶滅させる」という語とその同類の動詞群を、旧約世界から更に新約世界にまで広げ、そして対象とする人物も、スメルジャコフから更に他の登場人物たちにまで広げ、「聖絶」の概念を更に広いカラマーゾフの聖書的磁場の内に捉えるよう試

みてみよう。

### ③. 「絶滅させる」を巡って(2) — 主人公たちのドラマの中で —

スメルジャコフが記した「己の命を絶滅させる」。この遺書が置かれた磁場が聖書世界、殊に旧約の世界である可能性が高いことが確認された。だがスメルジャコフが旧訳聖書に通暁していたとしても、彼が旧約的「聖絶」の神、「怒りと裁きの神」をどのように受け止めていたか、また彼の生死と「聖絶」との関係は、まだ必ずしも明確にはなり切っていない。我々は更に「絶滅させる」あるいはそれと同類の動詞群が、スメルジャコフの遺書以外で用いられている例も確認してみよう。これらの動詞群は、主要な登場人物の言葉の内に、しかも彼らの思想と行動の核心とも言うべき部分に、互いに相呼応し合うかのように登場する。しかもそれらは必ずしも旧約の神と結びついているわけではない。そもそも「神という観念」自体を人間の心から「根絶させる」ことを目指す、ラディカルな叛逆の思想青年イワンもいれば、「虫けら」たる自分の命を「絶滅させる」ことを宣言するドミートリイもいれば、またゾシマ長老のように、この語をイエス・キリストを忘れた人間が、「滅亡」「絶滅」の危機に陥るであろうという終末論的危機を表明すべく用いる場合もあるのだ。イワンとドミートリイ、そしてゾシマ長老とアリョーシャ。彼らにおいて、これらの動詞群がどのように用いられているか、作品内での登場順に検討をし、カラマーゾフ世界において「絶滅」の概念が如何に用いられているかを広く捉え直してから、改めてスメルジャコフに戻ることにしよう。

#### (1) イワンの場合・1

「絶滅させる」(不完)、「絶滅させる」(完)と同類の「根絶させる」(不完)、「根絶させる」(完)。また「壊滅させる」(完)や「枯渇してしまう」(完)。イワンの言動に関わる中核部分にもまた、これらの動詞が登場する。まずは「場違いな会合」において地主のミウーソフが、イワンが町の上流階級の婦人たちの集まりで「地質学的変動」の思想を説いていたと暴露する部分を見てみよう。

「イワン君は議論の中で、以下のようなことを厳かに言明したのです —— この地上のどこにも、人間にその同類を愛するよう強いるようなものなど、絶対に何もありません。人間が人間を愛すべきだというような自然の法則など全く存在しないのだ。たとえ地上に愛が存在し、実際今に至るまで存在していたとしても、それは自然の法則によるものではなく、ひとえに人間が自分の不死を信じていたからに過ぎない —— イワン君はこれに、更に次のように付け加えたのです —— 正にここに自然の法則の全てがある。それゆえ人間の内にある自己の不死への信仰を

壊滅させてしまえば、人間の内にある愛ばかりか、この世の生を続けていこうという生命力も直ちに全て枯渇してしまふであろう。それどころか、そうなった暁には、もう不道德なものは何一つなくなり、一切が許されるであろう。人肉喰いさえもが・・・」(二六)

人間の内なる愛と生命力が、不死への信仰から来るものであり、しかもその不死への信仰とは生来の自然なものではなく、神という観念と共に、人間が後天的に造り上げた習慣でしかない。それゆえ、イワンによれば、ただ習慣・偏見でしかない「神と不死」への信仰を「壊滅させてしまひ」さえすれば、人間からは愛も生命力も「枯渇してしまひ」、消え去ってしまうであろうというのだ。

これはイワンの「地質学的変動」の正に核心部分である。モスクワにおける「神と不死」探求の末に至り着いた「地質学的変動」の思想。彼がこの思想の真理性と現実性を実証すべく故郷の家畜追込町に帰ったことは、既に繰り返し見てきた通りである(第1・2・3章)。イワンはこの人神思想を、まずはスメルジャコフに、そして町の上流階級の婦人たちに説いていたのだ。その思想の過激さは、ミウーソフの反応からも明らかなように、「壊滅させてしまふ」や「枯渇してしまふ」などの言葉の激しさと相俟って、それを直接聞かされた相手のみならず、間接的に聞き知った人々にも強烈な衝撃を与えていたのである。

この「場違いな会合」の場で、ミウーソフがイワンの「地質学的変動」の思想の宣布について暴露した時、集まりに遅れて到着したばかりのドミートリイも、この思想に大きな関心を寄せている。アリョーシャもまた、イワンと「大審問官」物語を挟んで対決した際に(五五)、兄の人神思想の帰結たる「一切が許されている」という定式に激しく反論する。彼もまた「神と不死」への信仰を「壊滅させてしまふ」という兄の過激な思想について聞き知り、心を痛めていたことが覗かれる。そしてアリョーシャは、大審問官へのキリストの接吻を斥けたイワンに、彼自ら接吻を与えるのである。だが先に見たように(第三章<sup>1</sup>)、「キリストの愛」を生きて伝えるアリョーシャの接吻に一瞬心を揺り動かされたものの、イワンを待ち構えていたのは、そしてイワンが会いたいと望んでいたのも、スメルジャコフであった。アリョーシャに背を向けたイワンは、この「前衛的肉弾」に「父親殺し」への最終的な同意を与えてしまうのだ(五六)。イワンの内なる悪魔の「否定の精神」は、行き着くところまで行かずには、つまり内なる「神と不死」の観念を「壊滅させてしまふ」ところまで行かずには最早立ち止まることが出来なかったのである。

## (2) イワンの場合・2

さてスメルジャコフとの三度目で最後の対決の場において、この異母兄弟の自殺を予感しつつも、そのまま立ち去ってしまったイワンを待ち受けていたのは、彼の内なる悪魔であった(十一九)。父親殺しの罪を最終的に自覚させられ、神に見つめられる自分を発見させられたイワンと、なお自らを神とする「倨傲の精神」に憑かれたイワン——悪魔は

このイワンをもう一度、モスクワで「地質学的変動」の思想を高らかに宣言していた頃の力溢れるイワンに立ち帰らせることであった。その「地質学的変動」の冒頭をもう一度見よう（第2章<sup>[5]</sup>）。

「彼ら〔神を否定する「新しい人たち」〕は全てを根絶<sup>ラズルニシチ</sup>させてしまい、人肉を喰らうことから始めようと考えている。愚か者どもめ。この俺様に尋ねようともしないで！俺に言わせれば、何一つ根絶<sup>ラズルニシチ</sup>させる必要などないのだ。人間の内にいる神という観念を根絶<sup>ラズルニシチ</sup>させてしまいさえすればよいのだ。仕事に取り掛かるべきは正にそこからだ。そこから始めるべきなのだ。ああ、何一つ理解しない盲人どもめ！ひとたび人間が一人残らず神を否定<sup>アトリツアーチ</sup>しさえすれば（そして俺はその時が、地質学上の時期と並行して成就するものと信じている）、その暁には、人肉など喰らわずとも、自ずと旧来のあらゆる世界観や、そして何よりも旧来の道德観の一切が失墜<sup>パースチ</sup>し、新しきもの一切が到来するのだ」（十一9）

モスクワのイワンが、如何に強く一切を否定しようとの願望、悪魔の「否定の精神」に憑かれていたか、改めて驚くべきものがある。ここで彼が用いるのは、スメルジャコフが遺書に記した「絶滅<sup>イストレブリアーチ</sup>させる」と同類の「根絶<sup>ラズルニシチ</sup>させてしまう」（完）「根絶<sup>ラズルニシチ</sup>させる」（不完）や、「否定<sup>アトリツアーチ</sup>する」「失墜<sup>パースチ</sup>する」等の極めて激しい動詞である。先に見た「壊滅<sup>ウニチタジーチ</sup>させる」（完）や「枯渇<sup>イシヤクヌーチ</sup>してしまう」も入れて、イワンがこれらの動詞群を用いる文脈を、もう一度彼の思索の歩みの中で確認しておこう。

先に確認した旧約諸書の動詞群は、基本的にはエホバ神の立場からの「聖絶」を表現するものであった。この「聖絶」の対象は異教神を信じる民と、エホバへの信を失ったイスラエルの民であり、これら二つの対象に対して「怒りと裁きの神」エホバの徹底的な「絶滅」が宣言され、そして鉄槌が下されるのだ。これに対してイワンの場合、「壊滅」「根絶」あるいは「否定」の対象とは「神と不死」の観念そのものである。神の立場に立つイワンが、「神と不死」の観念を「否定」し、「壊滅」「根絶」させてしまおうというのだ。イワンがこの「否定」と「壊滅」「根絶」の思想に至った経緯は、既に確認してある（第2章、「研究会便り（9）<sup>[5]</sup>」）。つまり人間の内にいる「神と不死」という観念、この不思議の前に正面から立ち、熱烈な探究を続けた「ロシアの小僧っ子」イワンは、やがて自らの内なる悪魔の「否定の精神」の導きに従い、「神と不死」という観念とは、実は人間の「良心」が根拠もなくただ怯えるだけの、何ら実体のないものだと考えるに至ったのだ。つい先にも見たように、そもそもこの「良心」の存在自体が、彼の悪魔によれば、「七千年にわたる、世界中の人間の習慣によって」創り上げられた、何ら確たる根などないものなのである（十一10）。それ故、このことに気づいた人間は、「神」という観念も「不死」という観念も、そしてそれらに怯える「良心」も「壊滅させてしまい」「根絶させてしまい」さえすればよいのだ。その時、一切は「失墜」「枯渇してしまう」であろう。そしてその後は、人間が

神になりさえすればよいのだ —— 「そんな習慣を捨てて、神になろうではないか」。この悪魔の囁きに、イワンは「然り」と答えたのである（同上）。

自らを「一切が許されている」神として宣言すること。イワンがこの結論に至る道程で行く手を遮った様々な障害、その中でも人間の内に根を張る「神と不死」という懼るべき観念の茨、そしてこの茨と複雑に絡み合う「良心」という名のもう一つの厄介な茨 —— これら人間の内に蔓延る茨一切を取り払うべく彼が振るった斧が、「壊滅させる」「根絶させる」「否定する」等の他動詞であり、また「失墜する」「枯渇してしまう」等の自動詞だったのだ。この斧はやがて実際に故郷の家畜追込町で、彼の「前衛的肉弾」スメルジャコフが手にする文鎮となって、父親フォードルの脳天をたたき割り、その存在を「根絶させ」「絶滅させ」、更には逆にイワンをもスメルジャコフをも「根絶させ」「絶滅させる」に至るであろう（第2・3章、本章<sup>[4]</sup>）。「悪業への懲罰」という名の「聖絶」である。

神という観念を「壊滅させる」こと、「根絶させる」ことから、逆にその神によって「壊滅させられ」「根絶させられる」ことへ。これら「絶滅させる」と同類の動詞群によって、作者ドストエフスキイが主人公たちのドラマを「ユダ的人間論」、更には「相互磔殺」の磁場の内に置き、旧約世界を超えて更に新約世界をも含む広く複雑な聖書的象徴体系の内に組み込んでいることが確認されるのである。（小出次雄の「相互磔殺」の概念については、拙著『ゴルゴタへの道』、新教出版社、2013。「ユダ的人間論」については、拙稿「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡 — ユダ的人間論とキリスト論 —」、『現代と親鸞』第三十七号、親鸞仏教センター、2018、等を参照されたい。「研究会便り」では5-7、殊に第7回目「はじめに」を参照）。

### （3）ドミートリイの場合

次にドミートリイである。前回見たように（第5章<sup>[3]</sup>）、グレゴリーイを殺害してしまったと思い込んだドミートリイは、翌朝太陽が昇ると共に自らの命を絶つことを決意し、ペルホーチンに次のように語りかける。

「僕は神の創造を祝福する。今も喜んで神とその創造を祝福しよう。だが・・・今は悪臭漂う一匹の虫けらを絶滅させてしまう必要がある。そいつが這いずり回って、他人の人生を台無しにしないように・・・」（八五）

グレゴリーイ殺害による罪意識が、ドミートリイに自らを「悪臭漂う一匹の虫けら」であることを自覚させ、自らの存在を「絶滅させる」ことを迫ったのだ。実際にはグレゴリーイは死ななかつたのだが、この「自己絶滅」の決意は、ドミートリイの自覚史の中で、決定的とも言うべき転換点の一つとなったと言えるであろう。前回の第5章<sup>[4]</sup>で見たように、この決意が彼をモークロエ村へと追いやり、グルーシェニカの回心体験の切っ掛けとなり、今度は逆に彼女に導かれ、「餓鬼」の夢を中心とする彼自身の回心体験が生まれる切っ掛けとなったからである。

「悪臭漂う一匹の虫けら」。思い起こされるのは『罪と罰』のラスコーリニコフだ。この青年もまた、いざ血の一線を踏み越えて悟らされたのは、自分がナポレオンどころか「一匹の虱」でしかないという厳然たる事実であった。そして彼もまたある一夜、自殺への衝動を抱え、ペテルスブルクの街をさ迷い歩く。だがこの青年は、結局生に帰還する。死によって問題が解決するとは思えなかったのだ。その後彼が辿るのは、ソーニャに導かれての長い「十字架」への道である。その同じ夜、何百万もの雨粒が滴り落ちる「<sup>レイン・ツリー</sup>雨の木」の根元で、自らの頭を拳銃で撃ち抜くのはスヴィドリガイロフだ。意識の底に埋もれさせていた忌まわしい罪の記憶が甦り、それに急き立てられた末の自己処罰、自己清算の自死である（拙著『「罪と罰」における復活—ドストエフスキイにおける聖書—』第五章、河合文化教育研究所、2007）。

『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』。ラスコーリニコフに対して、ドミートリイとイワン。スヴィドリガイロフに対して、スメルジャコフ。血の一線を踏み越えてしまった罪人たちが選び取る道、「十字架」への道と「絞首台」への道（十一9、第3章<sup>6</sup>、本章<sup>5</sup>）。ドストエフスキイが福音書的磁場において描き出す「悪業への懲罰」の二つのドラマである。スメルジャコフの自死もまた、その遠い予型を『罪と罰』のスヴィドリガイロフの自己処罰、自己清算の自死の内に持ち、ドストエフスキイ文学の長い流れの中に置かれる一つの悲劇であることが確認される。

ドミートリイに戻ろう。この青年に直ちに「自己絶滅」を決断させたもの。それはグレゴリーを殺害してしまったとの自覚と、自分が「悪臭漂う一匹の虫けら」でしかないとの痛切な認識であった。如何にもドミートリイらしい即座の激しい決断である。だがこの決断が、旧約的な怒りと裁きの神に迫られた「絶滅」への決断であったと考えることは難しい。ギリシア神話やドイツ・浪漫派の詩人たちを愛する彼が、それらと同程度に旧約聖書にも親しみ、この世界のドラマや概念を自らの言動の土台としていた痕跡はまず見られない。彼が用いた「絶滅させる」という動詞は何処に由来するのか。イワンがこの動詞自体は用いず、他の同類の動詞群を用いているのに対し（「壊滅させる」「根絶させる」「否定する」、また「枯渇してしまう」「失墜する」）、ドミートリイは、正にスメルジャコフと同じ動詞（スメルジャコフは「<sup>イストレブヤーチ</sup>絶滅させる」（不完）、ドミートリイは「<sup>イストレビーチ</sup>絶滅させてしまう」（完了）である）を用いて自殺の決意を表明しているのだ。「場違いな会合」で彼が耳にしたのはイワンの「地質学的変動」の思想である。この会合も彼の自殺の決意も共に、スメルジャコフの自死より二か月も前のことである。この語に関して、スメルジャコフとの直接の接点は見当たらない。

スメルジャコフとドミートリイとが図らずも共に、自殺の決意を表明すべく用いた「絶滅させる」。その根にあるのは、カラマーゾフ家全員の内に脈打つ「一切か、無か」の激しい精神と考えるべきであろう。あの柔和で静かなアリョーシャ。十七歳の彼が出家する経緯を記す筆者の筆を思い起こそう。イエスの呼び声に応えたアリョーシャは、「一切か、ニループリか」の厳しい二者択一の決意を胸に、故郷の家畜追込町に向かったと記される（一5、第4章、「研究会便り（11）<sup>2</sup>」）。「一切か、無か」の厳しい絶対排中律の精神

を以って「神と不死」を求めるアリョーシャ、その彼が生きる「実行的な愛」とそれが持つ「強さ」。これが第4章で我々の扱ったテーマであった(同上)。グレゴリーの血に塗れ、自らが「悪臭漂う一匹の虫けら」でしかないと悟ったドミートリイが、直ちに至った「自己絶滅」の決意。ここに彼独自のシラー的浪漫主義の精神が激しく脈打つことも否定は出来ない。だが我々は更に進んでこれを、アリョーシャの精神と響き合う、ラディカルなカラマーゾフ的宗教的心情の発露であると受け止めたい。アリョーシャやドミートリイばかりでない。本論が一貫して注目してきたのは、イワンはイワンで、そしてスメルジャコフはスメルジャコフで、それぞれのラディカリズムを生きて表現するカラマーゾフの兄弟たちのドラマである。「絶滅させる」とその同類の動詞群は、旧約的「聖絶」の概念であることに加えて、この兄弟たちの奥深くに脈打つ「一切か、無か」の精神を最も自然に表出する、いわばカラマーゾフ的語彙、あるいは「ロシアの小僧っ子」的語彙の内に広く位置づけられるべきであろう。それはアリョーシャの場合で明らかのように、また次のゾシマ長老の場合でも明らかのように、イエスとその十字架を向こうに置いた、優れて新約的精神と言うべきものであることも確認しておこう。

#### (4) ゾシマ長老・アリョーシャの場合、「主従」関係の問題

「<sup>イストレビーチ</sup>絶滅させる」と同類の動詞群は、アリョーシャが編纂した「ゾシマ伝」にも登場する。ゾシマ長老の説話と説教が収録された後半五つの章の内、二番目と最後の章である。第二章は「主従について、主従は互いに精神的に兄弟となり得るかについて」と題され(六3F)、最終章は「地獄と地獄の火について。神秘的考察」と題され(六3I)、共にゾシマ長老の思想を鮮やかに描き出すものである。後者では長老の「自殺者論」が紹介され、これにスメルジャコフの生と死に関するアリョーシャ自身の考察が織り込まれる形で、「ゾシマ伝」が締め括られる。この最終章の考察は本論の結論部を構成するものであり、その際に検討することにして(5)、p.50以下)、ここでは前者を取り上げておこう。

「ゾシマ伝」後半の第二章。ここで紹介されるゾシマ長老の言葉は、題名が示す通り「主従」関係を論じたものである。ところで我々は今に至るまで「主従」関係の問題を正面から取り上げてはいない。だがこの問題は、スメルジャコフと他の登場人物たちとの関係を中心に、既に様々な形で登場しており、この作品の主要テーマの一つと言うべきものである。ここで一度、このテーマを確認しておくことにしよう。

まず「主従」関係の問題で、我々読者に提示される最も衝撃的な事実とは、スメルジャコフがほぼ確実にフョードルの嫡出子であり、しかもこの父の下で働く下男であるという事実であろう。この「親子」と「主従」の歪な捩れこそ、この作品を動かす隠れた駆動力と言うべきものである。またスメルジャコフとイワンとは、互いに「<sup>いびつ</sup>異母兄弟<sup>ねじ</sup>」でありながら、また「地質学的変動」の思想を巡って深く共鳴し合う「師弟」とも呼ぶべき間でありながら、イワンはスメルジャコフとの間に「若旦那」と「下男」の隔絶を設け、インテリとは思われぬ蔑称を次々と投げつけ続ける。出会いの熱気が冷め、スメルジャコフの内

に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を認めるや、若旦那の心に生まれ出たのは「嫌悪感」でしかなかった。しかし「父親殺し」を巡り、二人の「主従」関係は完全に逆転してゆく。この逆転はやがて「悪業への懲罰」の現前と共に、更に顕著な悲劇的悪魔的相貌を帯びてゆくであろう。若旦那は下男に自らの罪の最終的な自覚に追い込まれ、更には神との出会いに導かれながらも、この「異母兄弟」を「絞首台」に残して去ってゆくのだ（以上第3・4章、「研究会便り（10）・（11）」）。またスメルジャコフという「異母兄弟」を、イワン以上に徹底して「若旦那」と「下男」の関係でしか扱わず、彼の自殺のことを知っても「犬」呼ばわりをするのが長兄のドミートリイである（第5章<sup>[6]</sup>）。だがこの若旦那を「父親殺し」の犯人に陥れることで、スメルジャコフもまた「主従」関係の逆転を痛烈に果たすであろう。一方、これら「主」と「従」の<sup>いびつ</sup>歪そのものと言うべき人間関係とは無縁な存在がアリョーシャだ。この「実行的な愛」の人は、イリュージョン少年に対してと全く同じように、スメルジャコフを他の誰とも「平等」であり「同じ」であるとして、接し続けるであろう（第4章、「研究会便り（11）」）。アリョーシャが亡き兄に捧げる「鎮魂歌」について考えることが、我々の最後の課題である（<sup>[5]</sup>）。

このようにスメルジャコフを中心として、カラマーゾフ家の「主」と「従」の問題は、各人それぞれの人間理解や世界理解とも深く結びつき、更には広く「罪なくして涙する幼な子」の問題と「実行的な愛」の問題とも密接に絡み合う形で、この作品を突き動かす大きな「負の駆動力」の一つである。アリョーシャが「ゾシマ伝」にこの一章を設け、そこに「主従について、主従は互いに精神的に兄弟となり得るかについて」との題名を付したこと自体が、彼がこの問題を如何に重大なものと考えていたかを示すものであろう。アリョーシャは家畜追込町で起こった様々な事件の少なくとも一因が、亡き兄スメルジャコフを中心とする歪な人間関係にあったものと捉え、改めて「主従」の問題を、師ゾシマ長老の言葉と重ねつつ、思索を重ねていたと考えられる。「ゾシマ伝」におけるこの思索もまた、師ゾシマ長老から命じられ修道院を出たアリョーシャの、「実行的な愛」の行為そのものだったのだ。また我々は、ドストエフスキイがこの「主従」の問題を、福音書におけるイエスの生と死に根を置く「実行的な愛」の問題として捉えていることも忘れてはならない（第4章<sup>[2]</sup>）。ゾシマ長老にとり「隣人愛における完全な自己犠牲の段階にまで至った」のがイエスであり（二4）、この存在は十字架上の死に至るまで「従」として、「僕」としての生を貫いたのだ。

前置きが少々長くなったが、以上を踏まえ、「ゾシマ伝」の中で「絶滅させる」とその同類の動詞群が用いられた箇所を見てみよう。修道院で孤独と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老が説くのは、アリョーシャによれば、俗世の人間の「主従」を超えた真の結合、イエス・キリストを範とする「実行的な愛」の必要性であり、その言葉の内に満ちるのは、己の知力のみを頼り、キリストの道から逸れてしまった人間の運命への痛切な危機感である。

「彼ら [自分たちの知力だけに頼る人間] は、公正に[社会を]建築することを夢見ている。だがもしキリストを拒否するならば、世界を血の海と化して終わるのであろう。なぜならば血は血を呼び、剣を抜くものは剣によって滅亡<sup>パキープヌチ</sup>してしまうからである。かくして、もしキリストの約束がなければ、その時人間は、地上において、最後の二人になるまで互いを絶滅<sup>イストレビーチ</sup>させ合ってしまうであろう。しかもこれら最後の二人は、己の傲慢さゆえに、お互いに我慢ということが出来ず、遂には最後の一人が最後から二番目の者を絶滅<sup>イストレビーチ</sup>させてしまい、その後は己自らをも[絶滅させてしまう]ということになる。《柔和で謙虚な者 [マタイ五5] のためには、このこと[艱難の期間]は縮められよう [マルコ十三 20] 》というキリストの約束がなかったならば、実際そうになっていたことであろう」(六 3 F)

世を支配する「主」と「従」の差別をなくし、人間が血と力に頼むことを止め、真の「兄弟」として結合すべきであること。このゾシマ長老の説教を支える二つの要素に注目すべきであろう。一つは、人々に「柔和で謙虚な者」として「実行的な愛」を生きることを説き、また自らがその生を十字架上で磔殺されるまで貫いたイエス・キリストへの、長老の絶対の信である。アリョーシャはこの師ゾシマのキリスト中心主義を、自らの「実行的な愛」の根としてここに提示したと考えるべきであろう。他の一つは、繰り返される「絶滅させる」や「滅亡する」が示すように、兄弟同胞への「実行的な愛」を忘れ、「主従」関係とそれを維持すべき知と力に拠って立つ人類を待つ「血と血」の争い、終末への切迫した危機感である。

ゾシマ長老が用いる「絶滅させる」と「滅亡する」。これらの語も基本的には神による「聖絶」を背景としたものであり、人類が至った危機に対する強い危機感が込められていることに疑いはない。だがその特徴はエホバ神が人間を一気に「絶滅させる」という、旧約的な怒りと裁きの神の容赦のない「聖絶」が直接前面に出されたものではない。ゾシマ長老によれば、今や人間は専ら己の知に立ち、己を主とし、己の力に訴え、つまりは「キリストを拒否し」「キリストの約束を忘れる」という重大な過ちを犯しつつある。つまり人間は進んで自らを「僕」とするイエス・キリストが示した「完全な自己犠牲」の道、十字架への道を忘れ、また拒否することによって、「相互絶滅」や「自己滅亡」の運命を招きつつあるのだ。ここには人類が到った危機を冷静に分析し、人類が再び立ち帰るべき原点、「キリストの約束」を提示するゾシマ長老がいる。我々は更にこのゾシマの思想を提示する、弟子アリョーシャの存在も忘れてはならないであろう。彼は自らが目撃したカラマーゾフ家の悲劇を向こうに置き、師ゾシマの言葉をそれに重ねつつ、キリストとその「実行的な愛」を忘れ、「相互絶滅」や「自己滅亡」に突き進んだ兄たちの姿を思い描いた可能性が少なくない。「ゾシマ伝」編集に当たるアリョーシャについては、本章の最後⑤で改めて考えよう。

「もしキリストを拒否するならば、世界を血の海と化して終わるであろう」。このゾシマの危機感の背後には、ひたすら合理主義と功利主義の道を突き進む近代西欧文明に対するドストエフスキ自身の痛烈な危機感と批判、そしてそこから逆に福音書のイエスとその「実行的な愛」に向ける熱い眼が存在すると考えるべきであろう。この二つは『夏象冬記』の旅（1863）以来、人間と世界とその歴史に向かうドストエフスキの視座を構成する基本的な要素となったものである。彼がこの旅で目撃した二都、文明の最先端をゆくロンドンとパリの街とは、実は異教神バアルとマモンの軍門に下った黙示録の街「バビロン」に他ならず、彼はこれら異教神に対する「限りない精神的抵抗と拒否」を心に期して帰国するのだ（拙著『<sup>お</sup>にがよもぎ<sup>ほし</sup>の星—ドストエフスキと福沢諭吉—』河合文化教育研究所、1997）。その最初の見事な結実が、血の一線を踏み越えたラスコーリニコフに対し、イエス・キリストの「実行的な愛」を生きるソーニャを提示した『罪と罰』であることは言うまでもない（拙著『「罪と罰」における復活—ドストエフスキと聖書—』河合文化教育研究所、2007）。『カラマゾフの兄弟』もまた、この『夏象冬記』の延長線上にある作品であることを忘れてはならないであろう。

### スメルジャコフの「聖絶」

スメルジャコフに戻ろう。絶対の孤絶と孤高の中で、自らの「罪」と共に裁きの神の前に立ち、その神の「聖絶」に重ねる形で、「己の命を絶滅させる」との結論に至ったスメルジャコフ。彼が遺書に記した「絶滅させる」という語は、他のカラマゾフの兄弟たちが持つ「絶滅」「壊滅」「根絶」の感覚とも呼応し、また人類が直面する終末についてゾシマ長老が説く危機感とも、更には後に見る「悪業への懲罰」の概念とも連なり、旧約世界の「聖絶」ばかりか、新約世界にも深く根を置くドストエフスキ独自の終末論的概念であることが明らかとなったように思われる。

以上のことを視野に収め、次に我々が取り組むべき課題は、「父親殺し」の決行から遺書を残しての自殺に至るまで、この二か月間スメルジャコフの内では何が起こっていたかを出来るだけ具体的かつ明確に浮き彫りにすることである。「悪業への懲罰」の現前によりスメルジャコフは如何なる神と、あるいはイエス・キリストと直面することになったのか。ドストエフスキは自らの終末論的「<sup>パ</sup>ラマ<sup>マ</sup>」の何処に、また如何なる形でスメルジャコフを置くに至ったのか。

これらの問題について、筆者自身の直接的言及を見出すことは難しい。だがそれらにアプローチする手掛かりが、皆無というわけでもない。例えば筆者は、イワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決を提示することで、これら二人がそれぞれの罪意識を介して神と出会うプロセスを圧倒的な迫力で描き出している。またアリョーシャに注目することで、「悪業への懲罰」の現前に曝された二人の兄について、この「実行的な愛」の青年が如何なる思いを抱き、また如何なる思索を続けたかを相当程度知ることが可能である。筆者が

提供する手掛かりは決して少なくはないのだ。以下では「悪業への懲罰」を手掛かりとして、スメルジャコフが向き合った神とは如何なる神であったのか、この問題から考えてゆこう。我々が最終的な目標として置くのは、冒頭で取り上げたスメルジャコフの遺書であり、アリョーシャを介したそのより十全な理解である。

## 4. スメルジャコフが向き合った「懼るべき」「活ける神」

### — 怒りと裁きの神、愛と救いの神 —

#### 「悪業への懲罰」

イワンの三度目で最後の訪問の時である。スメルジャコフは、自らが手を下した父親殺しについて、そしてその際味わった恐怖と懼れについて、イワンに詳細克明に語り聞かせる（十一 8、第3章、「研究会便り（10）」<sup>[4]</sup>）。筆者によれば、父親殺しから既に二か月が経ったにもかかわらず、これを語る時の彼は「興奮し、苦しげに息をつき、その顔には汗が浮かんでいた」という。血の一線を踏み越えた恐怖から、未だ彼は逃れられずにいたのだ。ゾシマ長老の言う「悪業への懲罰」の現前である。この「悪業への懲罰」について、やや遠回りのようではあるが、まず我々はゾシマ自身の体験と言葉に即して、次にはルカ福音書が伝えるイエスの言葉に即して考え、この概念をドストエフスキ自身如何に捉えてきたかを踏まえた上で、改めてスメルジャコフの恐怖と懼れに戻ることにしよう。

#### (1) ミハイルが体験したもの — ヘブライ人への手紙 —

血の一線を踏み越えるや否や、その人間の良心に罪意識を介して「裁きの神」が臨むこと——この「悪業への懲罰」（二 5）という概念を、ゾシマ長老は何時如何にして得るに至ったのか。直接的ではないとしても、これへの具体的かつ重要な手掛かりとなるものは、「ゾシマ伝」の前半に収録された一つのエピソードであろう。若きゾシマの前に現れた「謎の訪問客」ミハイルの物語である（六 2 D）。

ミハイルは道ならぬ恋が成就せず、相手を殺害してしまったものの、様々な偶然の重なりからその犯行が発覚せず、十四年もの時が過ぎたのであった。この間彼は社会的名声を築き上げる一方、一人「地獄」の苦しみを味わわされる。犠牲者の「復讐を叫ぶ血が」彼を追って離さなかったのだ。だがゾシマを知り信頼するに至ったミハイルは、いよいよその孤絶から抜け出て、自らの罪を明かす決心をする。秘密を打ち明けられ、ゾシマが返した答えはこうであった。「行って、告白をするのです」。ミハイルにもこの取るべき道は分かっていたのである。ところがゾシマに背を押されることになった今も、ミハイルはその一歩手前までゆきながら、どうしても踏み切ることが出来ない。二人の間に息の詰まるような押し合いが続いた最後の夜のことだ。ゾシマは聖書の一節を相手に示す。「活ける神の御手に 陥るは懼るべき哉」（ヘブライ人への手紙十 31）。この聖句を示されるや、ミハイル

は聖書を放り出し、身体を震わせながら、こう発したとされる。「懼るべき言葉だ。一言もない。よくお選びになった」。ミハイルは自分をかくも苦しめ続けていたもの、罪意識を介して自らに臨んでいたものが、犠牲者の「復讐を叫ぶ血」の更に向こうから臨む、「懼るべき」「活ける神」であったことを悟ったのだ。この決定的な覚醒、「懼るべき」「活ける神」による「絶滅」体験の後、殺人者は遂に告白を果たし、神の「樂園」に招かれ、その喜びと平安の内に息を引き取る。

後に見るように(本章<sup>5</sup>)、アリョーシャの編集になる「ゾシマ伝」の後半で紹介されるのは、様々なテーマに関するゾシマ長老の言説・説教である(六3 E-I)。それに先立つ前半部にアリョーシャは「伝記的資料」との副題を付け、ゾシマの兄マルケルの、次いでゾシマ自身の、そして今我々が見たミハイルの、「懼るべき」「活ける神」との決定的な遭遇体験を次々と紹介する(六2 A-D)。そしてこれらの神体験とは皆、ゾシマ兄弟やミハイルの旧き自己が「懼るべき」「活ける神」によって「絶滅」させられる体験であり、そこから彼らが新たな生に生まれ変わらされる体験に他ならない。アリョーシャが「ゾシマ伝」を前半と後半とに分け、師ゾシマの「生涯」と「説教」の二段組によって伝えようとしたのは、何よりもまず「懼るべき」「活ける神」の臨在であり、人間がこの「活ける神の御手」によって死から生へと、根本的に変革される必要と必然であったと言えるであろう。

「ゾシマ伝」を編集するアリョーシャの念頭にあったと思われる具体的な出来事を、ここでもう一つ確認しておこう。それは「場違いな会合」の場で(二5)、人間の犯した罪が如何に清算されるかという「教会裁判論」を巡る議論である。第2章(「研究会便り(9) <sup>4</sup>」)と第3章(「同(10) <sup>4</sup>」)で見たように、ここでゾシマ長老はイワンに対し、罪人の良心に罪意識を介して臨む神について、つまり「悪業への懲罰」あるいは「キリストの律法」について諄々と説き聞かせる。我々はこの場にアリョーシャがいたことを忘れてはならない。アリョーシャがその後、「父親殺し」に踏み込んだイワンとスメルジャコフが、長老の予言通り「悪業への懲罰」に曝されたことを明確に知るのは、彼の鋭敏な感性と兄たちへの愛に加えて、正にこの「場違いな会合」の体験があったからだと考えられる。アリョーシャが、これら二人の兄が体験した「地獄」について、如何に正確に把握していたか、そして如何に強く心を痛めていたかは、この後で彼の「祈り」を再検討する際に改めて確認しよう。作者ドストエフスキイは、ミハイルにせよイワンにせよスメルジャコフにせよ、「悪業への懲罰」に曝された罪人たちの心を窺う上で、アリョーシャという最良の導き手、「思考の参照枠」を我々に提供してくれているのである。

ここで一瞬、ゾシマ長老やアリョーシャの背後にいる作者ドストエフスキイに、改めて目を向けておこう。周知の如く『罪と罰』とは、血の一線を踏み越えたラスコーリニコフが体験させられる、文字通り懼るべき「罪と罰」のドラマであり、ドストエフスキイが描く「悪業への懲罰」のドラマの原点となる作品である。だが『罪と罰』の場合、殺人者ラスコーリニコフに臨む「悪業への懲罰」が全編四百ページ余りを費やして詳細克明に描かれたのに対し、『カラマーゾフの兄弟』のミハイルの場合は、彼の十四年にもわたる苦悩の

一切が僅か十ページの内に凝縮され、しかも彼が苦しめられた恐怖と懼れの本質が、ズバリ一つの聖句を以って明らかにされるのだ(「活ける神の御手に陥るは懼るべき哉」、ヘブライ人への手紙十 31)。『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』の間に横たわる十五年近くの歳月は、罪人の良心に臨む「懼るべき」「活ける神」の裁きのリアリティに関して、ドストエフスキイの認識を深めさせ、かつそれを刻む筆をも冴え渡らせたのだ。かくして「悪業への懲罰」という視点から見る時、後期ドストエフスキイ文学とは、作者ドストエフスキイが旧約新約両世界に連なる「聖絶」の概念を、一人ひとりの人間と神との対決のドラマとしてひたすら内面化させ、先鋭化させる過程であったと言えるであろう。スメルジャコフのドラマもまた、イワンのそれと共に、ラスコーリニコフから始まるこの「悪業への懲罰」の文脈上に置かれること、そしてこの青年がソーニャやリザベータに発し、アリョーシャやゾシマ長老に至る「実行的な愛」の人々と対置される対立軸・問題軸の系譜の内にあること、これらを確認しておこう。

## (2) 「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」 — ルカ福音書 —

更にここで確認しておくべきは、この「懼るべき」「活ける神」現前のリアリティとは、今見たヘブライ人への手紙もそうであるが、ドストエフスキイが旧約新約両聖書との取り組みから、とりわけ新約のイエスとの取り組みから与えられた最も重要な<sup>リアリティ</sup>神感覚の一つであった可能性である。とりわけドストエフスキイ世界の「悪業への懲罰」と直結するのは、ルカ福音書が伝える次のイエスの言葉であろう。

「我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何を<sup>のち</sup>も爲し得ぬ者どもを懼るな。懼れるべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに<sup>これ</sup>之を懼れよ」(ルカ十二 4-5)

イエスの言葉として伝えられる、恐らくは最も人の魂を震撼させる言葉の一つであろう。再三繰り返される「汝らに告ぐ」と「汝らに示さん」。この単純な枠組み自体が既に、「懼るべきもの」が語り出される只ならぬ雰囲気を醸し出す。そして「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」—— 血の一線を踏み越えた人間の良心に臨み、その存在を根底から裁き去り焼き尽くし「絶滅させる」神。その<sup>スミノーゼ・トレメンドゥム</sup>超越的恐怖感を串刺しにする言葉として、ドストエフスキイは福音書中にこのイエスの言葉を見出し、『罪と罰』以来その創作の根底に置いたと考えられる。この「懼るべき」「活ける神」の圧倒的<sup>リアリティ</sup>現前感を前にして、主人公たちは「もうこれ以上どこにも行き場のない」絶体絶命の窮境に追い込まれ、自分が「虱」あるいは「虫けら」たる罪人でしかないことを魂の底から悟らされ、「絶滅」させられてきたのだ。ラスコーリニコフ像の一つの源泉となったと言われるマクベスの恐怖と狂気も、正にこの「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者」との直面によって引き起こされた、底知れぬ恐怖と狂気であったと言えよう(シェイクスピア『マクベス』)。

「活ける神の御手に陥るは懼るべき哉」

「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」

我々は新約のこれら二つの言葉の内に、「悪業への懲罰」を描くドストエフスキ自身に触れていた「懼るべき」「活ける神」の臨在感、罪人の旧き自己を「絶滅させる」神のリアリティを見出せるであろう。

筆者はルカの伝えるイエスの言葉が、実は師イエスを裏切り、十字架<sup>ユダ</sup>架上に追いやって逃げ去った弟子たちが、その後<sup>ユダ</sup>に襲われた言語に絶する恐怖と絶望、懼れの感覚を表現したものではないかと考えている。この問題は「研究会便り」の第5回目から第7回目のテーマと連なるものであるが、改めてまた別の機会に論じたい。

以下ではスメルジャコフが父の殺害と共に襲われたパニックに改めて戻り、ここを出発点として、彼に臨んだ「懼るべき」「活ける神」に関する情報を順次検討し、その「悪業への懲罰」の内実を出来るだけ明らかにするよう努めよう。具体的にはイワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決に焦点を絞る作業である。この対決については、既に第1章で概観し、第3章のイワン論でも詳しく検討してあるのだが〔4〕、ここでもう一度確認しておこう。そこからスメルジャコフの直面した「神」が、罪人に「怒りと裁きの神」として臨むばかりでなく、「愛と赦しの神」としても立ち現れてくる、「懼るべき」「活ける神」であることの確認に進むためである。

## スメルジャコフが向き合った二つの神 (1) 怒りと裁きの神

「悪業への懲罰」、「裁きの神」の現前

スメルジャコフに対する「悪業への懲罰」は、フォードル殺害の正に現場で始まったのであった。このことを報告するスメルジャコフ(十一8)については、つい先に見た以外にも、我々は既に第3章で確認してある(「研究会便り(10)〔4〕」)。それから四日が経ち、モスクワから家畜追込町に戻ったイワンが初めて病院を訪れた時のことである。この時既にスメルジャコフは、漠然とした形ではあるが、イワンに対して「神様」について言及をしているのであった。「今だって、この私たちの話を聞いている者など誰もいません。正にこの神様以外には」(十一6、第3章〔4〕)。我々はこれを無視することも、スメルジャコフがイワンに向けて発した冗談、或いは小話と取ることも出来ない。運命への復讐を遂げるべく父フォードルの脳天に鉄槌を振り下ろした瞬間から、この殺人者は「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者」の現前に曝され、それを「神」として受け止め続けていたのだ。

ともすると読み過ぎされかねない筆者の記述を注意深く繋げてゆく時、そこに浮かび上がるのは、作者ドストエフスキイが周到に描くスメルジャコフの神との直面のドラマである。このドラマを刻むドストエフスキイの筆は、血の一線を踏み越えたラスコーリニコフ造型以来の内面に食い込むリアリズムを以って、緩急を交えた見事なものである。その極点が『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスをなす、彼とイワンとの三度にわたる対決である(十一・6・7・8、第1章、第3章)。この作品が「ロシアの小僧っ子」たちの神認識の深化と覚醒に至るプロセスを追う「成長史」、宗教的成熟に向けた魂のドラマとして周到に構成されていることに目を向けない限り、このクライマックスたる三章は、父親殺しの兄弟二人が延々と繰り広げる散漫な対決劇としか映らないであろう。以下では今見た一回目の訪問に続き、イワンが二度目に訪問した後の、スメルジャコフの「激変」とも言うべき変貌から、三度目で最後の対決に至るまでを改めて確認しておこう。

### スメルジャコフの激変

二度目の訪問の時である。スメルジャコフから父親殺しに対する罪の自覚に追い込まれたイワンは、パニックに陥ったままカチェリーナの許に飛び込んだのであった(十一・7、第3章<sup>4)</sup>)。ところが彼女が取り出して見せたのは、父親殺しの意図を明瞭に記すドミートリイの手紙であった。安心し切ったイワンの心から、その後一か月の間、スメルジャコフは追い払われてしまう。その間彼の許には、スメルジャコフが「重い病」にかかり、頭も変調をきたしているとの噂が、また彼は発狂に到るであろうとの見立てを語る医者さえいるとの噂も流れてくる。ところがイワンは、これらの噂を一切真面<sup>まとも</sup>に取り合わなかったのである。この一か月の間に、スメルジャコフには一体何が起こっていたのか。例によって筆者は、直接は何も語らない。我々が「謎の一か月」と呼び、この作品における最も恐ろしい「空白」とする所以である(第3章<sup>4)</sup>)。だが、火の無き所に煙は立たず。これらの噂の背後には、間もなく見るように、スメルジャコフの精神を発狂が予測されるまでに錯乱させ、またその肉体を死相が出るほどにまでに衰弱させるような何事かが、着実に進行していたのだ。

事実、様々な噂に正面からは反応をしなかったイワンも、その噂の向こうにある何事かを無視し通すことは出来なかった。次第しだいに心の底から湧き上がる不安と罪意識に、イワンは自らの心を鎮めようとするかのようにドミートリイの逃亡計画を画策し、彼自身も人格崩壊の兆しを強めてカチェリーナを不安の底に陥れ、遂には吸い込まれるようにスメルジャコフの許に出かけてゆくのである(十一・5・8)。

### イワンの三度目で最後の訪問

訪れたイワンに対し、マリアはスメルジャコフの健康は既に危機的な状況に至っていること、その精神も「ほとんど正常ではない」こと、だが暴れるわけではなく「この上なく静かにしている」ことを伝える。事実、部屋に入ったイワンが目にしたスメルジャコフと

は、一か月前の彼とは「すっかり面変わりがし、すっかり瘠せて顔は黄ばんでいた」。また「その目は落ち窪み、目の下には青い隅があった」。死相が出たとも言えるべき相貌で、スメルジャコフは「この上なく静かに」何と向き合っていたのか？

二人の遣り取りの詳細は省略しよう(十一 8、第3章<sup>[4]</sup>)。この期に及んでもなお要を得ない問いを発し続けるイワン（この心理については第3章<sup>[1]</sup>を参照）。この若旦那に対し、最初は「嫌悪感」さえ示していたスメルジャコフが、いよいよ決定的な宣告を下す。「では申しませう、その、あなたが、正に殺したのです」。それでもなおイワンが示す相も変らぬ鈍感な反応に、今度はスメルジャコフの方が強烈な衝撃を与えられる。「本当に、本当に、今までご存知なかったのですか」。この瞬間である。イワンの眼を覆っていた「恐れ」と「夢」と「幻」が崩れ落ち、その向こうに現れ出たのは、神の前に立つスメルジャコフであった。バラムの眼が啓かれ、新たなバラムの驢馬が顕われ出たのだ。この驢馬は、抜き身の剣を手にも道に立ち塞がる神の使者と向き合う驢馬だったのである（民数記二十二 31、本章<sup>[2]</sup>）。ここではイワンの言葉は省き、バラムの驢馬・スメルジャコフが語る言葉だけを、第3章<sup>[4]</sup>に続いてもう一度見ておこう。

「どんな幻もここにはおりません。私たち二人と、その他にもう一人、第三の存在以外には。疑いなくその存在は今ここにいます。その第三の存在は、私たち二人の間にいるのです」（十一 9）

「この第三の存在とは、神です。正にこれは神様です。それが今ここに、私たちの傍にいるのです。ただ、あなたには探しても、見つかりはしません」（同）

憔悴し切ったスメルジャコフが何と向き合っていたのかが、ここに明らかとなる。イワンが一度目に訪問した際に発した「<sup>ブラヴィヂェーニエ</sup>神様」という言葉を、今スメルジャコフは「<sup>ボフ</sup>神」とも、再び「<sup>ブラヴィヂェーニエ</sup>神様」とも、また「<sup>オン</sup>それ」とも呼ぶ。「神」を知らずして「神」を語り、「神」を知らずして「神」を地上から放逐し、遂には自らを「神」とするに到ったイワンに対する、これ以上痛烈な皮肉があるのか。この場面が我々を導くのは、「謎の訪問客」ミハイルに若きゾシマが示したヘブライ人への手紙である。「活ける神の御手に陥るは懼るべき哉」。スメルジャコフとイワンは共に、「懼るべき」「活ける神の御手」に陥っていたのだ。

### 「怒りと裁きの神」と、「愛と赦しの神」

さてこの「懼るべき」「活ける神」から吹き寄せる<sup>ヌミノーゼ・トレメンドゥム</sup>超越的恐怖感を前に、スメルジャコフが「己の命を絶滅させる」に至るまで、残された時間はあと僅かではない。だがそもそも彼にとって、この「懼るべき」「活ける神」とは如何なる神であったのか。

文鎮で父親の脳天を叩き割った瞬間から襲われたパニック、「悪業への懲罰」を通してスメルジャコフに臨んだ神を、我々は今までただ「裁きの神」とも、旧約的な「怒りと裁きの神」とも、また新約のルカが記すイエスの言葉を用いて「殺したる後ゲヘナに投げ入る

る「權威ある者」とも、同じく新約のヘブライ人への手紙が記す「懼るべき」「活ける神(の御手)」とも様々に言い表し、最終的には今「懼るべき」「活ける神」と呼ぶに至った。その遺書に記された「己の命を絶滅させる」との表現からは、スメルジャコフの意識にあった神とは、自らの意思に背く被造物を有無も言わず一気に「絶滅させる」「聖絶」の神、旧約的な「怒りと裁きの神」であった可能性がまずは高いと考えられる。スメルジャコフはこの「怒りと裁きの神」の前に立たされ、死相が現われ出るほどにまで憔悴させられ、苦しめられていたと考えるのが自然であろう。

だが拙速は避けるべきである。思い起こすべきは、『罪と罰』以来ドストエフスキイが描いてきた神である。それはただ罪人を「虱」あるいは「虫けら」の自覚に追い込み、彼らを裁き去り焼き尽くし、「絶滅させる」だけの神ではなかった。ソーニャやその友のリザベータを始めとし、ゾシマ長老やその兄のマルケルやアリョーシャに至るまで、ドストエフスキイが描いた神とは、彼らの旧き自己を「絶滅させる」「聖絶」の神、懼るべき「怒りと裁きの神」であると共に、そこから彼らを新たに「樂園」「神の国」に招き入れる「愛と赦しの神」でもあったのだ。

「絶滅させる」とその同類の動詞群の検討から明らかとなったこともまた、この作家は登場人物たちを、ただ旧約的「聖絶」の磁場の内のみ封じ込めてはいないという事実であった(本章②、③)。ドストエフスキイは「絶滅させる」という動詞群に、イワンからその対極のゾシマ長老に至るまで、彼らの思想の核心を表わすべく、巾広い宗教的象徴性を持たせているのだ。一方のイワンにおいては、「神という観念」を「根絶させる」というユダ的悪魔性が極限化されて表現され、他方のゾシマにおいては、「主従」という罪深い関係の維持を計るべく、互いを「絶滅させ合う」人間を待ち構える終末の裁きが表現され、この「絶滅させる」という動詞を介して、知に溺れる人間が拒否し忘れ去った「キリストの愛」が逆照射されるのである。

「悪業への懲罰」を通して、ドストエフスキイがスメルジャコフに直面させたものとは、ただ「怒りと裁きの神」だけではなく、それと対極的な「愛と赦しの神」でもあったのではないか。つまり彼が出会ったのは、相反する極性において働く「懼るべき」「活ける神」だったのではないだろうか—— 新たな問いの前に立った我々に対して、作者ドストエフスキイは、事実この角度からのデータを様々に提供しているように思われる。

### 「懼るべき」「活ける神」、その極性

この問題<sup>データ</sup>の検討に進む前に、我々はまず旧約的な「怒りと裁きの神」と、新約的な「愛と赦しの神」について少し考えておこう。そもそも旧約的「怒りと裁きの神」と、新約的「愛と赦しの神」とを相容れない対立概念として措定し、キリスト教の成立を後者が前者に取って代わったことだと考えること自体が、余りにもナイーブで図式的なユダヤ教とキリスト教理解と言うべきであろう。旧約の中にも新約的要素は数多く存在し、その逆もまた真なのだ。我々が先に取り上げたヘブル人への手紙が記す「活ける神の御手に陥るは懼

ろしき哉」も、ルカ福音書のイエスが語る「殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ」も共に、新約の内において旧約的な「怒りと裁きの神」の激しさを伝えるものであるが、何ら新約的精神に矛盾するものではない。それらは共にイエスの精神に反するどころか、イエスその人のリアリティを強く正確に映し出すものとして、むしろ本来的な位置を占める表現とさえ言うべきであろう

イエスとその師たる洗礼者ヨハネに目を向けてみよう。マルコやマタイを始めとして、全ての福音書がその冒頭か冒頭近くで伝えるのは、人々に激しく罪の悔い改めと神への立ち帰りを迫る洗礼者ヨハネの宣教である。若きイエスは、この旧約的「怒りと裁きの神」を激しく生きる洗礼者ヨハネの許に赴き、ヨルダン川に恐らくは突き落とされ、「罪の赦しとなる回心の洗礼」（マルコ4）を施され、旧き自己を正に「絶滅させられ」、その弟子となったのだ。師ヨハネがヘロデ王によって殺害された後、新たに「神の国」の宣教を開始したイエスの内に、師と通ずる激しく厳しい預言者的精神が脈打っていたことは、福音書の様々なエピソードが活写するところである。

バプテスマの「浸礼者ヨハネ」あるいはバプティズン「沈め男ヨハネ」によるイエスの洗礼〔浸礼〕について、殊に「洗礼」ならぬ「浸礼」が持つ激しさと宗教的意味の重要性については、佐藤研著『はじまりのキリスト教』、岩波書店、2010を参照。また佐藤の弟子である吉田新の『バプテスマのヨハネ』、教文館、2012も参照。

「ヌミノーズ」の概念を軸に、宗教史的発展の視野から、「聖なるもの」・「神」が歴史の場に顕現する過程として、旧約世界から新約世界への連続性を辿った上で、イエスとその十字架上の死を決定的な到達点とみなすのがR.オットーである（『聖なるもの — 神性の観念における非合理的なるものと、その合理的なるものとの関係について —』山谷省吾訳、岩波書店、1968 [1917]）

イエスの内に強く脈打つ旧約的預言者的精神。それを示す典型的な一例が、ドストエフスキイが『悪霊』のエピグラフに用いた「ゲラサの豚群」の奇跡物語であろう（ルカ8 26-39 // マルコ5 1-20、マタイ8 28-34）。ある男に取り憑いた悪鬼たちを、イエスが二千匹もの豚の内に追いやるや、豚群は直ちにゲラサの湖に雪崩を打って転げ落ち、悪鬼ともども滅ぼし尽される。旧約的な正に「聖絶」とも言うべき、鬼気迫る悪鬼追放物語である。この奇跡物語を伝えた人々にとりイエスとは、人間の内なる「悪鬼たち」を有無も言わさず一気に「絶滅させる」懼るべきデュナミス「力」の存在であり、彼らは何よりもまずイエスが与えるこの圧倒的超越的存在感に心を震撼させられ、「懼れと驚き」の念に打たれたのであろう。神を愛として捉え、あるいは愛の神に捕らえられ、その神の愛を十字架上で惨殺されるまで貫いて生きたイエスを、ただ「愛と赦しの神」を体現した優しく物静かな存在とするのは、

生彩のない物静かな宗教的青年というアリオージャ像を作り上げるのと同じく、余りにも片面的な理解と言うべきであろう。洗礼者ヨハネの弟子として「怒りと裁きの神」、旧約的「聖絶」の神を激しく生きると共に、それに劣らず「愛と赦しの神」を十字架に至るまで激しく生きたイエスが持つ豊饒な極性に目を向けずイエス像を創り上げることは、これはキリスト教の成立について紋切り型の理解を自らに押し付け、イエスが伝えた「神の国」のリアリティを見失い、「懼るべき」「活ける神」の極性が持つ超越的感覚から遠いところに自らを立たせる危険性が大きい。ドストエフスキイがその生涯に描き続けたイエス像も、この両極の間でなされたイエス像探求の足跡として受け止めるべきであろう。

ドストエフスキイの「イエス像の構成」については、拙論「ドストエフスキイのイエス像」(雑誌「あんじやり」33、親鸞仏教センター、2017)。更に「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡 — ユダ的人間論とキリスト論 —」(雑誌「現代と親鸞」第37号、親鸞仏教センター、2018)を参照されたい。

血の一線を踏み越えたスメルジャコフもまた、このような「懼るべき」「活ける神」の両極二相に触れさせられたからこそ、そして自らの内にも外にもこれら相反する極性を見出すに至り、それら両者を容易には消化し切れなかったからこそ、最終的な発狂を予想されるほどにまで、しかも死相が現われ出るほどにまで憔悴し切り、部屋で一人「この上なく静かにしていた」のではなかったか。

以下ではこの角度からスメルジャコフにアプローチをし、彼が最終的に選び採った「絞首台への道」とその遺書の意味について、更なる考察に進みたい。

## スメルジャコフが向き合った二つの神 (2) 愛と赦しの神

「怒りと裁きの神」と共に、スメルジャコフが触れるに至った「愛と赦しの神」——この角度から見る時、事実作者は後者についても、否、後者についてこそ、少なからぬデータを提供していることに気づかされる。ドストエフスキイが描くのは『シリアの聖イサクの苦行説教集』であり(A)、また具体的には既に見てきたように、スメルジャコフの傍らに寄り添う「親切な人々」の存在であり(B)、殊に「実行的な愛」の人アリオージャである(C)。これらについて、順次検討をしてゆこう。

### (A). シリアの聖イサク

#### 「黄色い背表紙の何か分厚い本」

スメルジャコフに臨んでいた「懼るべき」「活ける神」とは、恐怖と懼れを以って臨む「裁きの神」のみではなかったこと。このことを我々に考えさせずにはいない様々なデータが

存在する中で、看過してならない第一のものは、スメルジャコフのテーブルの上には「一冊の黄色い背表紙の何か分厚い本」が置かれており、それは『シリアの聖イサクの苦行説教集』だったとされることである。死相が出たとも言うべき相貌で、医師からは発狂さえ予想される「ほとんど正常ではない」精神状態で、スメルジャコフはこの分厚い本を、ただテーブルの上に飾っていただけだ、あるいは盗み出した三千ルーブリ札の束を一時置く「重し」のために用いただけだなどと考えるならば、我々は作者ドストエフスキイのメッセージを大きく受け取り損なうであろう。作者が我々読者に、ここから一步も二歩も踏み込んで考えることを要求していることは明らかである。スメルジャコフが向き合っていた「懼るべき」「活ける神」が持つ両極性の内、「怒りと裁きの神」に対するもう一つの極、「愛と赦しの神」についてである。

『シリアの聖イサクの苦行説教集』。既に見たように（第1章<sup>4</sup>）、これはグレゴリーが旧約聖書のヨブ記と『殉教者列伝』と共に、長い間取り組んでいた書物であった。乞食女スメルジャシチャヤがある夜、グレゴリー夫婦の赤ん坊の埋葬の夜のことである、自らの命と引き換えるかのようにこの世に産み落としていったスメルジャコフ。この赤ん坊を、これもまた自分たちの赤ん坊の命と引き換えるかのように引き取ったグレゴリーは、立て続けに襲われた「自然界の混乱」を前にして、「神様のこと」を学ぶべく、これら三つの書物を手に取ったのである。筆者によれば、グレゴリーは聖イサクの書物を一行も理解出来なかったという。だがそれゆえにこそ、彼にはこれが一層貴重なものであり、この書物を何年にもわたり黙々と読み続けたという。このグレゴリーを引き継ぐかのように、スメルジャコフは聖イサクの書物を自らのテーブルの上に置いたのだ。ここに作者ドストエフスキイの意図を読もうとしない不注意、あるいは怠惰さは許されないであろう。

『シリアの聖イサクの苦行説教集』。この書物に記されたこととは「神様のこと」に他ならない。しかもここには「怒りと裁きの神」に対するもう一つの「懼るべき」「活ける神」、即ち「愛と赦しの神」以外の何もかも語られてはいないと言っても過言ではないだろう。

### 『シリアの聖イサクの苦行説教集』

聖イサクの書物について纏めることは容易でない。しかし敢えて記せば、何よりもまずこの聖者が示そうとするのは、人間の如何なる罪をも超える圧倒的な神の愛についてである。続いて強調されるのは、地上においてこの神の愛を、十字架上の死に至るまで、永遠の真理として証をすべく生きたイエス・キリストと、その十字架に向ける畏れと感謝だ。神とイエス・キリストに続いて、聖イサクが目を向けるのは人間である。この世という穢れた大海にある限り、人間が陥らざるを得ない様々な試練と試み。その試練と試みとに正面から向き合い、自らもイエスに倣い十字架を担う時、その人間に初めて顕われ出るのが神の<sup>プロビデンス</sup>意図と恩寵の不可思議である。これらのことを核として更にイサクが説くのは、神とイエス・キリストの愛と赦しを前にしても、また歩むべき十字架の道が目の前に示されても、なお人間が陥り続ける罪の深さについてである。またそれゆえにこそこの聖者は、己

の罪と過誤に対する絶えざる悔い改めと謙抑の心の必要を訴えるのだ。また人間が神とイエス・キリストの愛に至り、そこに溶け入るための「祈り」の必要と勧告も繰り返され、究極的には祈りを超えた祈り、神を求める人間に与えられる奥深い宗教体験とその感動が語られる——以上のように要約することが可能であろう（シリアの聖イサクについては、拙著『カラマーズフの兄弟論』VII C 5、「補遺」、参考文献Eなども参照）。

### 聖イサク、そしてゾシマ長老

聖イサクの思想を前にして、直ちに我々に思い起こされるのはゾシマ長老と、その説くところである（「研究会便り（11）<sup>[2]</sup>・<sup>[4]</sup>」）。人間が犯す如何なる罪をも凌ぐ「神の愛」と「キリストの愛」、これを至高のものとして訴える点で、聖イサクもゾシマ長老も軌を一にする。つまり罪人に対し「怒りと裁き」の「聖絶」を以って臨む神に対して、二人は罪人に対し「愛と赦し」の「聖絶」を以って臨む神を強く打ち出したと言えるであろう。尤も先に見たように（<sup>[3]</sup>）、己の知と力に強く寄り頼み、「キリストを拒否し」「キリストの約束を忘れる」に至った現代人に対し、強い終末的危機感を表明するゾシマ長老、また罪人に対し、懼るべき「悪業への懲罰」を以って臨む神を打ち出すゾシマ長老と較べると、主として隠遁の修道僧たちに向けて語られる聖イサクの説教は「祈り」が強調されて静的であるが、その内に燃える信仰の炎はゾシマに劣らず熱い。また罪と苦難を介して人間が神の現前に触れ、究極はその赦しと愛という神の<sup>プロビデンス</sup>摂理の内に摂取され、新たに十字架を担った生を生きるよう促されるとする点で、両者が展開するのは典型的なキリスト教的救済論と言えるであろう。概して二人の思想は、互いに驚くべき類似性を持つものである。

イワンやスメルジャコフのように、人間と世界の究極の真理、神の存在とその<sup>プロビデンス</sup>摂理について、最終的な確信に至り得ず、遂には悪魔の「否定の精神」に<sup>くみ</sup>与しようとする青年たちにとって、これら聖イサクやゾシマ長老の存在は疎ましいものであると共に、人間を超えた超越的存在とその愛を絶対の確信を以って指し示す点で、完全には無視し切れぬものがあつたと考えられる。イワンが帰郷後、自ら「場違いな会合」を設定してゾシマ長老との対決を計ったのと同じく（第3章<sup>[3]</sup>）、「父親殺し」の後、スメルジャコフは『シリアの聖イサクの苦行説教集』を取り出し、聖イサクとの対決を計ったと考えれば、ドストエフスキがこの作品の基本的骨格として置く「否定と肯定」の対立軸も、ここに一つ自然と浮かび上がると言えよう。

### スメルジャコフとイサクとの出会い

ところでスメルジャコフは具体的に何時、また如何にして『シリアの聖イサクの苦行説教集』を手に入れることになったのであろうか。これについても筆者の直接の言及はない。だが思い起こすべきは「場違いな会合」の日の夜、フォードル宅での夕食後のエピソードである。突如棄教者論を展開したバラムの驢馬・スメルジャコフは、山をも移す「芥子種一粒ほどの信仰」（マタイ十七 20）の困難さについて語り、そのような信仰を持つ人間など「全

世界でもせいぜい一人か、多くても二人くらいのもの」でしかないと言ひ放ち、しかもそのような人間も「どこか遙かエジプトの砂漠あたりで密かに修行しているために、彼らを探し出すことなど決して出来はしない」と断言するのであった（三七、第2章<sup>4</sup>）。スメルジャコフの想像力は祖国ロシアから遠く離れたエジプトの砂漠にまで及び、その修道士にして初めて保たれ得る純粋な信仰に思いを馳せていたのだ。彼が養父グレゴリーイの持つ砂漠の修道士聖イサクの説教集を、たとえそれに心を預けることはなかったとしても、以前から密かに紐解いていた可能性も決して少なくはないと考えるべきであろう。あるいはグレゴリーイがこの本を、スメルジャコフの許に直接持ち来った可能性も考え得るであろう。また修道院にあるこの書物を、アリョーシャが彼の許にもたらした可能性も否定は出来ない。この辺の事情を筆者は一切記さない。だがいずれにせよ筆者は『シリアの聖イサクの苦行説教集』が、スメルジャコフの死に至る直前まで彼の部屋のテーブルの上に置かれていたと記すのだ。この事実と、ここにある決定的とも言うべきメッセージを無視して、イワンと共にスメルジャコフの部屋を立ち去ることは、我々には出来ない。

イワンがスメルジャコフの心の奥深くに見出したのは「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」であった。そのスメルジャコフがシリアの聖イサクの書物と向き合い、そこに説かれたことが人間に対する神の無条件の愛であることを知った時、その「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」は何を感じたのか。理不尽で醜悪な運命ゆえに「自尊心」を傷つけられ、万人万物一切に対して憎悪と呪いと復讐の心を振り向けていた彼は、それまでの人間観と世界観を覆すような視界が開かれるのを感じた可能性はなかったか？ —— この問題こそ『カラマーズフの兄弟』と取り組むドストエフスキイが、その最深奥に置いた課題の一つであったと考えられる。そしてこれが我々の最後の課題として取り組みつつある問題である。

## (B).「親切な人々」

スメルジャコフが触れていた「神の愛」、あるいは「キリストの愛」。この問題について考えるにあたり、聖イサクの書物以外にもう一つ、我々は具体的なしかも極めて重大な事実を忘れてはならない。この若者の周囲にいる「親切な人々」が彼に注いだ愛である。聖イサクの書物と共に、スメルジャコフはこの人々が自分に注いでくれていた愛にも、改めて気づくに至ったと考えるのが自然であろう。

本論の初回、第1章で我々がまず目を向けたのはマリアであり、彼女がスメルジャコフに対して注ぎ続ける愛についてであった。病弱で年老いた母の面倒を看るべく帰郷した彼女が、その母に加えて隣家の下男スメルジャコフに注いだ愛は、彼の死に至るまで一貫した純朴なものであり、我々読者の胸を打たずにはいない。二人の逢瀬の場において、このマリアの前でギターを片手にしたスメルジャコフが見せる気取った態度は、およそ「人間嫌い」で「女嫌い」と言われるスメルジャコフ像とはほど遠い、微笑ましいものでさえある。それは愛する女性との束の間の逢瀬を楽しむ、一人の純朴な若者の姿そのものだ。さもなければ、たとえ父親を惨殺した住いに再び戻ることを嫌ったとしても、どうして彼が

「婚約者」として、病院から直接マリア母娘の新居に引き取られることに同意しようか（十一6）。「悪業への懲罰」の現前によって「懼るべき」「活ける神」と直面させられたスメルジャコフが、シリアの聖イサクの説教集と向き合っていたという事実と共に、その書物が置かれたのはマリアの住まいであるという事実、彼はその死の時までマリアの愛の磁場の内にいたのだという事実を、我々は決して忘れてはならない。亡き母の墓を探し出すべく故郷の家畜追込町に戻ったアリョーシャは、町の郊外の修道院でゾシマ長老と出会い、以後彼は長老に対して「初恋とも似た」全情熱を傾け続けたとされる（一4）。我々はここに、作者がモスクワから家畜追込町に遣わした二人の天使、その二人が作る愛の磁場という構図を、スメルジャコフとの間に読み取ったとしても、何らおかしくはないであろう。

スメルジャコフを愛したのはマリアだけではなかった。繰り返し見てきたように、養父グレゴリーもその妻マルファも共に、宗教的痴愚の乞食女スメルジャンチャヤがその命と引き換えるかのように産み落としていった「孤児」を「神さまの子」として引き取り、聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名まで与え、大切に育ててきたのだ（三2、第1章<sup>[4]</sup>）。このことはスメルジャコフ自身も十分に承知していることであった。病院を訪れたイワンから必要なものはないかと問われて、彼はこう答えている。「マルファ・イグナチエーヴナが私を忘れずにいてくれて、必要なものが何かあれば、今まで通り親切に色々と助けてくれます。それに親切な人々が毎日、見舞いに来てくれます」（十一6）。また三度目で最後となったイワンの訪問の際にも、彼はグレゴリー夫婦についてこう語っている。「あの人たちは、私が正に生まれ落ちてから、常に優しくしてくれたのです」（十一8）。

スメルジャコフに対するグレゴリー。その一見粗暴な態度の裏にあるものとは、創世記を用いての「寺子屋」教育にせよ、ルカの聖句「母の胎を開いた」を用いての叱責にせよ、自分たち夫婦に与えられた「神さまの子」パーヴェルに向ける、尽きることのない愛の表現以外の何ものでもない（第1章、「研究会便り（8）」<sup>[4]</sup>）。

フォードル殺害当日のことも思い出そう。イワンが去った後、いよいよスメルジャコフは偽の癲癇発作を起こす。彼の狙いは自分をグレゴリー夫婦の寝室に運ばせることであった。アリバイ作りと前線基地の確保のためである。幼くして癲癇発作を起こした時以来、夫婦は病人を自分たちの寝室に運び入れ、衝立の仕切りで囲った寝台に寝かせ、手厚く看病をしてやっていたのだ。スメルジャコフの悪魔的知力、育ての親二人の愛を運命の復讐劇のために利用したのである。彼は二人の愛を十分に知っていたのだ。

### スメルジャコフの内面に至る道

自分を取り巻く「親切な人々」、マリアとマルファとグレゴリーが自分に注いでくれる愛。『シリアの聖イサクの苦行説教集』が説く、人間のあらゆる罪を超える神の愛——これらは我々の眼を、「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を抱え、一人片隅から世界に白い目を剥くこの青年の内に導き、そこに存在する愛の水脈に焦点を合わせることを迫らずにはいない。我々はこの青年が父親殺害後、「悪業への懲罰」が現前する中で、聖イサクの書物

を手を取った事実を知る時、これと相前後して、彼が自らの周囲にいる「親切な人々」の存在とその愛に新たな眼を向け始めたと考えたとしても、何ら不自然ではないだろう。文鎮で父親の脳天を叩き割り、運命への復讐を果たしたスメルジャコフに臨んだのは、「怒りと裁きの神」と共に「愛と赦しの神」であり、彼は理不尽で醜悪な己の運命が、ただ悪意のみで構成されていたのではなかったことに気づき始め、新たな思考の大転換を迫られた可能性が大きく浮かび上がってくるのだ——死相が出るほどにまで憔悴しつつ、スメルジャコフが向き合っていたのは、「怒りと裁き」と「愛と赦し」の両相を以って臨む「懼るべき」「活ける神」であり、これら相反する神の極性がこの青年の内で互いに深く結びついては斥け合い、また互いに強く反発しては惹きつけ合い、その心を引き裂いていた可能性である。

スメルジャコフの内で起こりつつある思考の大転換、心の分裂葛藤について、筆者が直接記すことはない。彼の内面について我々読者が直接的かつ客観的に知り得る道は、まずどこにも存在しないように見えるのだ。だがこの「寡黙さ」、この「空白」の一方で、作家ドストエフスキイは、一見無関係とも思える情報によって、我々読者がスメルジャコフの内面にアプローチする大きな手掛かりを提供してくれている。アリョーシャである。つまりドストエフスキイはこの作品の筆者・語り手に、「悪業への懲罰」が臨む二人の兄スメルジャコフとイワンについて、「実行的な愛」の人アリョーシャが如何なる思いを抱いていたかについて、少なからぬ情報を提供させているのだ。一つはアリョーシャの「祈り」であり、他の一つは彼が編集した「ゾシマ伝」の最終章である。これから見てゆくように、それらのいずれにおいても、直接スメルジャコフという名が記されることはない。だがアリョーシャが念頭に置くのが亡き兄スメルジャコフであることは明らかである。

またそれらの情報も、スメルジャコフの心の内そのものをストレートに伝えるものではない。だが我々はアリョーシャの心に映し出されたスメルジャコフ像を、外からではあるが、的確に知ることが出来るであろう。そしてアリョーシャの心に映し出されたスメルジャコフ像は、実に冷静で厳しいリアリズムによって把握され表現されたものである。我々はこのスメルジャコフ像の内に、亡き兄に対するアリョーシャの思いを知ることが出来るばかりでない。同時にここには、スメルジャコフに臨んでいた「懼るべき」「活ける神」が、「怒りと裁きの神」の相にせよ、「愛と赦しの神」の相にせよ、ある程度正確にその姿を映し出しているのを見出すことも期待出来るであろう。

### (C). 「実行的な愛」の人アリョーシャ

#### アリョーシャ造型上の「破れ」？

スメルジャコフが病院で口にした「親切な人々」。これらの中にアリョーシャも入るのかどうかについて、筆者は直接何も語らない。また我々が先に第4章全てを充てて辿ったのは、専らイリュージン少年とアリョーシャとの交流であり、少年の苦しみに寄り添うアリョーシャの「実行的な愛」の姿であった。だがこの町に住むもう一人の「罪なくして涙す

る幼な子」スメルジャコフと、アリョーシャとの交流が前面に出されることはまずないのだ。このため多くの読者が「実行的な愛」の人としてのアリョーシャは認めるものの、スメルジャコフに対しては冷淡なアリョーシャという印象を与えられかねず、実際ここにアリョーシャ造型上の「破れ」を見出す読者や評者も少なくない。だがこれは「実行的な愛」と、それが向けられる「罪なくして涙する幼な子」という、この作品の基本的対立構図・問題軸を見失っていることからくる誤解であろう。更にこの見方は、この問題軸を具象化するにあたり、作者ドストエフスキイが用いた戦略を十分に理解しないことからくる誤解であり、そこから生じる歪なアリョーシャ像であると言わざるを得ない。

以下で我々は、スメルジャコフに向けられたアリョーシャの「実行的な愛」について考えてゆこう。この検討は最後の⑤まで続くのだが、まずは「実行的な愛」と「罪なくして涙する幼な子」というこの作品の基本的対立構図・問題軸についての再確認から始めよう。

### 「実行的な愛」と「罪なくして涙する幼な子」

『カラマゾフの兄弟』の基本骨格をなす「神と不死」の探求と「父親殺し」、そして「罪なくして涙する幼な子」たち。「はじめに」で記したように我々は、作者ドストエフスキイがこれら三つのテーマに、それらを受ける形で「実行的な愛」というテーマを置き、これら四つを以って作品の基本的対立構図・問題軸を構成したと考えた。これも「はじめに」で記したのだが、殊に「罪なくして涙する幼な子」たちについてドストエフスキイは、彼らの存在を三層で提示していると考えられる。まず長男ドミートリイを始めとするカラマゾフ家の四人の兄弟たちであり、また次男のイワンが凝視する地上世界に満ちる受難の子供たちであり、更に家畜追込町という具体的な現実の中に生きるイリュージン少年と、カラマゾフ家の家長フョードルの非嫡出子スメルジャコフ、これら三つの層である。これらの中でも、三番目の「幼な子」二人と末弟アリョーシャとの交流を描くにあたって、ドストエフスキイは長短・濃淡・緩急を交えた対照的な戦略・手段を取ったと言えるであろう。

まずイリュージン少年の場合を見てみよう。ドストエフスキイはこの少年とアリョーシャとの交流を描くにあたり、様々な情報を実に丁寧に積み上げてゆく。つまりイリュージンとコーリヤ二人の少年の交流から始まって、「ジューチカ事件」と「垢すりへちま事件」、そして「ペン・ナイフ事件」と「投石合戦」を経て、エピローグの「告別説教」に至るまでのエピソードが、この少年に関するアリョーシャの認識の深化と、それに応じた「実行的な愛」の行動に沿う形で、クレッシェンド的にまた詳細に、時にはセンチメンタルとも言えるほどの感情移入を以って描き込まれるのである。これらについては、既に前々回の第4章で、我々はその全体を確認してある(研究会便り(11))。

他方スメルジャコフに関しては、アリョーシャとこの異母兄弟との具体的交流の描写は、素っ気ないほどにまで最小限に絞り込まれる。第一回目から何度も確認してきたことだが作者は、スメルジャコフと MARIA との会話をアリョーシャに立ち聞きさせること、そして

マリアをしてスメルジャコフの自殺をアリョーシャに知らせるべく夜の町を疾走させること、これら二つの決定的な出来事にのみ描写を限定させるのだ。つまり作者は、これら異母兄弟の交流に関してはマリアを介して、出発点と終結点というドラマの大きな枠組みの設定のみに留めるのである。しかしそれら二つを刻む描線は太く的確である。

家畜追込町の「罪なくして涙する幼な子」二人と、アリョーシャとの交流に関する対照的な扱い。作家ドストエフスキイが、作品の全体を見据えて創り上げた周到な原構図と、それに沿って作品を具体的に刻む見事な戦略的手腕—— これらを踏まえる限り我々は、一方から他方を推し測ることで、アリョーシャの「実行的な愛」の内実について、そしてまた二人の「罪なくして涙する幼な子」たちの内面について、様々に推測することが可能となるであろう。以上のことを念頭に置き、スメルジャコフに向かうアリョーシャと、その「実行的な愛」についての考察に進むことにしよう。

## 5. アリョーシャの「ソシマ伝」 — 兄スメルジャコフへの鎮魂歌 —

### 残された様々な問題

先に我々が至ったのは、父親殺しの直後から始まった「悪業への懲罰」により、死相が現れるほどにまで憔悴しつつスメルジャコフが向き合っていたのは、「懼るべき」「活ける神」であるということ、しかも彼は「活ける神」の相反する両極的な二面と直面していた可能性が高いということ、これらの問題の前であった。「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」との直面である。だがこの両極性を持つ「懼るべき」「活ける神」の現前と、彼の自殺との間には果たして如何なる関係があるのか、このことは必ずしも明らかでない。スメルジャコフはイワンが去った直後に自殺をする。だが二人の最後の対決の場面から、この謎を解く直接的かつ決定的な手掛かりを得ることは容易でない。「怒りと裁きの神」と向き合うスメルジャコフが、殺到する余りもの恐怖と懼れに耐え切れず、あるいは余りもの痛切な悔恨の末に自殺に至ったとするならば、理解はそう困難ではないだろう。だが「愛と赦しの神」と直面していた彼が自殺をしたとなると、理解はそう簡単ではない。「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」とは、この青年の心に如何なる形で臨んでいたのか。そしてこの事実は、如何にして彼を自殺へと追いやったのか。これらのことも決して明らかではないのだ。アリョーシャが、このすぐ後で見ると、兄たちに現前しつつある「悪業への懲罰」について察知し、心を痛めていたことは明らかである。だがそもそもスメルジャコフの心の内について、殊に兄に現前する「悪業への懲罰」の内実について、彼はどの程度具体的に知っていたのか。そして如何なる反応をしたのか——我々の前には実に多くの問題が、未だ曖昧なままに残されているのである。

### スメルジャコフの内面に至る二つの道

先に記したように、これらの問題にアプローチする方法として、我々にはアリョーシャを導き手として二つの道が与えられている。それらは共に「悪業への懲罰」に曝されたスメルジャコフの内面に外から、つまりアリョーシャの視線に沿ってアプローチをするという道である。第一の方法としては、人格崩壊間際のイワンと自殺直後のスメルジャコフについて、アリョーシャが神に捧げた「祈り」を再度検討してみることである(A)。第二は「ゾシマ伝」最終章の検討である(B)。先に見たように(第3章、「研究会便り(10) [6]」、前者でアリョーシャは、自殺直後の兄スメルジャコフについて、短いが厳しく的確な判断を下したのであった。後者においても、これから見るようにアリョーシャは、師ゾシマの「自殺者論」と重ねる形で、彼自らの「スメルジャコフ論」を、これも厳しく的確に展開するであろう。これら(A)も(B)も共に、飽く迄もアリョーシャの主観が捉えたスメルジャコフ像である。だがこれら二つのスメルジャコフ像の間には、後に考えるように、少なくとも二か月以上の、あるいは更に相当の時間が横たわっている。それゆえこれらの間には、兄に臨んだ「悪業への懲罰」についての、また亡き兄スメルジャコフの生と死についての、アリョーシャの思索と認識の深まりが少なからず反映していると考えてよいだろう。つまりそれらは「懼るべき」「活ける神」と向き合った兄スメルジャコフについての、アリョーシャならではの厳しく的確なリアリズムが捉えた観察と思索の深まりなのである。

## (A). アリョーシャの祈り

### 祈りに至るまで、修道院を出て

アリョーシャとスメルジャコフとの接触・交流について、何度も言及したように、ドストエフスキイはその具体的描写は最小限に絞り込んでいる。アリョーシャによる恋人たちの逢瀬の立ち聞きと、彼の許へのマリアの夜の疾走という、大きな枠組みだけが設定されるのだ。マリアによって兄スメルジャコフの自殺のことを知らされたアリョーシャは、その同じ夜、神に祈りを捧げる(十一10)。主人公の心の最深奥でなされる祈りが明らかにされるという、ドストエフスキイ文学においても稀有な場面の一つである。この祈りの背景について、殊にそれまでの二人の異母兄弟の関係について把握しておくために、少々遠回りとなるが、この時に至るまでのそれぞれの足跡を改めて簡単に確認しておこう。

まずはアリョーシャの行動の大きな流れである。ゾシマ長老の死を契機とする一連の宗教体験から三日後、この青年は修道院を出て、家畜追込町での生活を開始する。「俗世で修道士としてあり」「神の民を愛するのだ」という師の遺訓に従ったのだ(第4章[2])。その後の彼は、「父親殺し」の激震に見舞われる兄弟のイワンとドミートリイばかりか、ホフラコワ夫人とリーザ母娘、仇敵同士のグルーシェニカとカチェリーナ、そしてイリュージン少年とスネギリョフ一家の許を絶えず訪れ、彼らの傍らに寄り添い、その苦しみや怒りや悲しみ、不安や愚痴、そして喜びや讃歌等々に正面から向き合い続けている。だがこの間の彼とスメルジャコフの関係について、筆者が直接言及することはない。

検討すべきは、アリョーシャとマリアとの交流についてである。周知の如く、スメルジ

ヤコフによるフォードル殺害は、マリアとの逢瀬の翌日夜のことだ。血の一線を踏み越えるやパニックに陥ったスメルジャコフを、追い打ちをかけるように真正の癲癇発作が襲い、彼は病院に運び込まれる。「悪業への懲罰」の開始である。スメルジャコフの余りにも激しく長い発作は郡医を驚かせ、この医師は患者の命の危険さえ口にする（九二）。先に見たように、恐らくこの病院に「毎日」彼を見舞った「親切な人々」の中に、マルファに加えてマリアがいたことは、ほぼ確実と考えてよいであろう。フォードル殺害から四日後には、モスクワから戻ったイワンが病院を訪れる。だがそれから二週間後、イワンが二度目に訪れた先とは、スメルジャコフが「婚約者」として身を寄せるマリアの新しい住まいであった。三度目で最後の訪問は、それからまた一か月ほどが経ってからのこと、これも同じマリアの住まいである（第1章<sup>2</sup>、第3章<sup>4</sup>）。以上のような事情から、アリョーシャがスメルジャコフに近づこうとした場合、彼はまず確実にマリアと接触していたと考えてよいであろう。スメルジャコフのことで、アリョーシャがマリアと初めて語り合う機会があったとすれば、恐らくそれはスメルジャコフの入院中のことであったと考えられるのだ。

### マリアの転居

これらの事情と経緯を考える中で、我々の前に少なからぬ違和感を以って浮かび上がる事実、改めていくら注意してもし過ぎることがないことは、退院と共にスメルジャコフがマリアの「婚約者」として、彼女の新居に移り住んだという事実である。既に見たように（第1章<sup>2</sup>）、カラマーゾフ家の隣家に住み、マルファから毎日パンとスープを恵んで貰うほどの極貧にあえいでいた母娘が、何故、何時、また如何にしてその家を売り払い、貧弱とはいえ新しい住まいに、しかも極めて短時間の内に移り住むことが出来たのか。我々はここにアリョーシャの影を見た（第1章<sup>2</sup>、殊に第3章<sup>4</sup>）。この問題を改めて考えてみよう。

今見たように、病院にスメルジャコフを見舞ったアリョーシャは、たとえこの病人が彼との面会を拒絶したとしても、そして恐らくその可能性は高かったであろうが、少なくとも病人の恋人であり隣家の住人でもあるマリアとは会話の機会を持ち得たであろう。二人の会話については、様々な推測が可能である。だが筆者が記す事実のみ目を向けよう。我々の前に提示されるのは、繰り返しの確認となるが、イワンの病院訪問から二週間と経たぬ内に、マリア母娘がそれまでの住まいを売り払って新たな住まいに引っ越し、ここにスメルジャコフを「婚約者」として引き取り、新たな生活を開始したという驚くべき事実である。この事実の背後に、アリョーシャの存在以外の何があるろう。

新たに家畜追込町での生活を開始したアリョーシャには、以前の養育者ポレーノフが残してくれた金が利子を含めて二千ルーブリはあり、加えて父の死がやがて莫大な遺産をもたらすであろうことも見込まれていた。マリアの引っ越しの物質的条件は整っていたのである。

またアリョーシャは、一張羅の装いをしたモスクワ帰りの恋人たちが、緑色のベンチで

東の間の逢瀬を楽しむ姿を目の当たりにしていた。スメルジャコフに対し、ひた向きに心を傾けるマリア。一方、素っ気ない素振り彼女に惚え、ギターの弾き唄いをするスメルジャコフ。これら二人の間に流れる愛情を見て取れぬほど、アリョーシャは朴念仁の宗教的痴愚ではない。「実行的な愛」の人アリョーシャの内にも、「カラマーゾフの血」は脈々と流れているのだ。ここにも彼がスメルジャコフを「婚約者」という名目の下に、マリアの新居に引き取らせるに十分な条件は存在していたのである。ちなみにアリョーシャの「実行的な愛」について、筆者はこう記す。「彼には曖昧さということが耐えられなかった。というのも彼の愛のあり方は、常に実行的なものであったからだ。受け身の形で愛するということは、彼には出来なかった。ひとたび愛すると、彼は直ちに助けにかかるのだ」(四五)。イリュージョン少年にしたように、そしてその父スネグリオフにしたように、彼は「直ちに」マリアを、そしてスメルジャコフを助けにかかったのだ。尤もスメルジャコフ自身はこの時、なお真正の癲癇発作の余波の内に入り、アリョーシャの提案を知らなかったか、たとえ知ったとしても、拒絶をしたと考えるのが無理のないところであろう。恐らく事はスメルジャコフには明かされないままに進行したのであろう。

マリアとスメルジャコフとが共に「去勢派」に属するとして、そこからこの引越しを説明する立場もあるが(江川卓『謎解きカラマーゾフ』、新潮選書、1991)、本論はそれを採らない。この説は二人が去勢派に属し、世の悪魔たる「蛇」を退治すべき宗教的社会的使命を帯びた「白いキリスト」としてのスメルジャコフ像を打ち出す。またこの新しい住まいにおける宗教的儀式としての聖なる乱婚も想定する。しかしこのスメルジャコフ・マリア去勢派信徒説は、この作品の主人公であるアリョーシャや、ゾシマ長老やシリアの聖イサクが体現する「実行的な愛」、つまり「神の愛」と「キリストの愛」を核とするキリスト教の救済思想に対して、如何なる決定的独自性を持つのかという内在本質的考察も説明も何もしないまま、ただ異端たる去勢派信徒、「白いキリスト」スメルジャコフ像へのエキゾチックでエキセントリックな関心のみを前面に打ち出しているように思われる。またその一方で、新約聖書の磁場におけるユダとイエスについての考察が何もなされないまま、突然「白いキリスト」スメルジャコフをユダだとする立論がなされるのも、無理があると言わざるを得ない。(『カラマーゾフの兄弟』における聖書との取り組みの姿勢と方法については、拙著『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』前編Ⅳ、河合文化教育研究所、2016を参照。また拙論「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡 — ユダ的人間論とキリスト論 —」、雑誌「現代と親鸞」第37号、親鸞仏教センター、2018も参照)

### アリョーシャとイリュージン、そしてスメルジャコフ

以上、修道院を出た後のアリョーシャの行動の流れと、父親殺害後のスメルジャコフの病状の経緯、あるいは「悪業への懲罰」の現前、そしてアリョーシャとマリアとの交流の可能性等について簡単な確認をし、兄スメルジャコフに対するアリョーシャの姿勢、その「実行的な愛」の可能性について考えた。ここで我々が思い起こすべきは、これらと並行してイリュージン少年とアリョーシャとの間で進行していたドラマのことである。

第4章で見たように、アリョーシャはスネギリョフ家の「穴倉」を「毎日」訪れ、他の少年たちと共に、イリュージン少年の怒りと悲しみと苦悩に寄り添い続けている。イリュージンとの交流ばかりか、コーリヤを始めとする少年たちとアリョーシャとの交流を描くドストエフスキイの筆は、「エピローグ」における「告別説教」に至るまで実に木目が細かく、また愛情に満ちたものである。この事実を一方に置く時、作者がこの「実行的な愛」の人アリョーシャをして、たとえ面会は拒絶されたとしても、スメルジャコフの許を「毎日」足繁く訪れる「親切な人々」の一人として設定していなかったと考えることは、不自然と言うべきであろう。ましてこれら二人の異母兄弟の交流・接触について、作者は描き忘れていたのだとか、無視したのだと考えたり、或いはアリョーシャの「実行的な愛」の「破れ」を指摘したりするとしたら、これらは不自然であるどころか、論外と言うべきであろう。殊に忘れてならないことは、「死の床」にあるイリュージンの苦悩とは、「垢すりへちま事件」を始めとする少年の不幸な境遇に由来するところも少なくはないが、直接は「ジューチカ事件」への罪意識によるところが大きいという事実である（第4章、「研究会便り（11）<sup>[5]</sup>」）。罪意識に苛まれるこの少年を日々見舞うアリョーシャが、少年を唆し仔犬のジューチカにピン入りのパンを飲み込ませた兄のスメルジャコフを、どうして忘れたり無視したりすることがあろうか。「犬殺し」どころか、アリョーシャは一貫してこの兄が、「父親殺し」の実行犯であることを信じて疑わなかったのである（十一6、十二4）。しかもフォードル殺害の前日、アリョーシャはスメルジャコフとマリアとの逢瀬の現場に偶然居合わせ、この兄が自分の理不尽で醜悪な運命ゆえに、グレゴリーを始めとする世の一切を呪い、更にはイエス・キリストに痛烈な呪詛の言葉まで投げつけるのを耳にしていたのだ（五2）。アリョーシャの心に、スメルジャコフが痛みと共に住み着いていたと考えることは、この作品の核心を理解する上で、決定的に必要なことと言うべきであろう。そして事実ドストエフスキイは、「父親殺し」の罪にそれぞれの形で苦しめられる二人の兄、「悪業への懲罰」に曝されるイワンとスメルジャコフが、アリョーシャの心の内で如何に捉えられていたかを、はっきりと我々読者に知らせもするのだ。アリョーシャの祈りである。

### アリョーシャの祈り

アリョーシャの祈りの内に捉えられ、表現されたイワンとスメルジャコフを再度見てみよう（十一10、第3章、「研究会便り（10）<sup>[6]</sup>」）。この祈りの時、既にスメルジャコフは自殺しており、駆けつけたマリアからこの事実を知らされたアリョーシャは、直ちに彼女と

共に現場に直行し、壁からぶら下がった遺体と直面すると共に、その遺書も読んでいる。この間イワンは、神に向かう彼の心を再び逆転させようとする悪魔によって意識を錯乱させられ（つまり「揺れ戻し」である）、人格崩壊の寸前となっていた（十一9）。スメルジャコフ自殺の報を持ってイワンの許に駆けつけたアリョーシャは、漸く兄を落ち着かせて寝かしつける。筆者が報告するのは、この後のアリョーシャの祈りと瞑想である。二人の兄の「重い病」のことで、アリョーシャが如何に心を痛めていたか、また同時に彼が如何に冷静に厳しく事態を把握もしていたかが明らかとなる。第3章⑥に続いてもう一度、彼の祈りと瞑想を引いておこう。

「彼[アリョーシャ]にはイワンの病気のことが分かって来た。《誇り高い決心の苦しみだ。深い良心なのだ！彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ》。《そう》、既に枕に横たえたアリョーシャの頭の中を、このような考えが掠めた。《そうだ、スメルジャコフが死んでしまった以上、兄の供述を誰も信じはしないだろう。だが兄は出かけて行き、供述をするだろう！》。アリョーシャは静かに微笑んだ。《神様が勝つのだ！》。こう彼は考えた。《真実の光の中に立ち上がるか、あるいは・・・信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する<sup>バギーブヌチ</sup>かだ》。アリョーシャはこう悲痛な気持ちで付け加えると、再びイワンのために祈るのであった」  
(十一10)

「神様が勝つのだ！」。罪人の良心に臨む神の怒りと裁き。錯乱し人格を崩壊させつつあるイワンと対しながら、いよいよ兄において「悪業への懲罰」(二5)が終わりに近づきつつあること、「キリストの律法」(同)が兄の内に現前しようとしていることを、アリョーシャは冷静かつ的確に見て取ったのだ。事実その翌日イワンは法廷で、神と世を前に見事な「供述」を成し遂げ、人格崩壊と共に「死の床」に沈むであろう。新生への展望を含んだ、終わりの時の始まりである。

これと同時にアリョーシャの心が向かうのは、もう一人の兄スメルジャコフである。「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する」——スメルジャコフの遺書にあった「己の命を絶滅<sup>イストレブリーチ</sup>させる」が、アリョーシャの心で響き続け、ここに「滅亡する<sup>バギーブヌチ</sup>」となって表現されたと見てよいであろう。この直前、マリアと共に壁にぶら下がったスメルジャコフを目の当たりにし、その遺書に接したアリョーシャは、この兄がイワンとは逆に「信じていないもの」、即ち悪魔の手に渡り「滅亡した」と考えたのだ。兄スメルジャコフが叩きつけた運命への「恨み」と「憎悪」、そしてイエスと「神と生命への呪い」(六3I、後述)は、アリョーシャにとってそれほどまでに根深く激しいものと映ったのだ。またその末に兄が選び取った死は、彼にとってそれだけ一層懼ろしく痛ましい衝撃だったに違いない。ここにいるのは、二人の兄の「重い病」について冷

静かつ的確に、しかも厳しい眼で見つめるアリョーシャである。再度確認をしよう。この時のアリョーシャは、神の手に攝取されようとしている兄イワンとは対照的に、もう一人の兄スメルジャコフは悪魔の手に渡ったまま、「自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する」に至ったと捉えたのだ。

### 「十字架への道」と「絞首台への道」

話が前後するが、次に確認すべきは、アリョーシャの祈りに先立つ錯乱状態の中で、イワンが発した二つの言葉である。その支離滅裂な饒舌の中で、イワンはアリョーシャに向かい、スメルジャコフが「絞首台」への道を選んだのに対し、自分は「十字架」への道を選んだと口にするのだ。

「明日は十字架で、絞首台ではない。否、俺は首を吊ったりはしない！ お前は知っているな。俺は決して自殺など出来はしないことを、アリョーシャ！ 卑劣さからだろうか？ 俺は臆病ではない。生への渴望からなのだ！ 何故俺はスメルジャコフが首を吊ったということを知っていたのだろうか？ そうだ、これはあいつ [悪魔] が言ったのだった・・・」(十一 10)

「十字架」への道と「絞首台」への道。人格崩壊の崖を転げ落ちつつイワンは、自分たち「父親殺し」の兄弟二人が歩む道を、既に的確に把握していたのである。これは「悪業への懲罰」が臨む二人の罪人の運命を理解するために、作者がイワンを介して我々読者に与えた大きな手掛かりと考えるべきであろう。スメルジャコフについての様々なエピソードが提供された後で、「観照者」スメルジャコフ像が打ち出され、彼が新たに向かう道が我々読者に提示されたのと同じ手法である(第2章<sup>[3]</sup>)。

さてイワンは、スメルジャコフが「絞首台」への道を選び取ったのに対し、自分が「十字架」への道を取るのは、「卑劣さ」からでも「臆病」だからでもなく、内なる「生への渴望」からだとする。己の内に脈打つ「生への渴望」を正面から生きること、それは「卑劣さ」などではなく、己の十字架を負って生きることであり、己のカラマーゾフ的「生への渴望」の浄化と聖化への道に他ならないことを、イワンは解体しつつある意識の中で確かに捉えていたのだ。大審問官に対するイエス・キリストの接吻と重ねられたアリョーシャの接吻に、イワンが一瞬与えられたあの感動と覚醒が(五五、第3章、「研究会便り(10)<sup>[1]</sup>)、彼の内ではなお生きていたのである。「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復する」—— エピローグに置かれたこのドミートリイの言葉は、イワンの没落を正確に捉え、かつ彼が沈んだ「死の床」を超えて訪れる未来を的確に予言するものと考えられるべきであろう(第3書<sup>[3]</sup>)。

一方、「絞首台」への道、マタイ福音書が記すユダの道を選び取り(マタイ二十七 3-10)、「死の床」に沈むどころか、既に死の彼方へと走り去ってしまったスメルジャコフ。では

スメルジャコフはアリオージャの内、悪魔の手に渡り「憎悪で滅亡する」に至った人間として整理をされ、永遠に忘れ去られるのであろうか。亡き兄について、アリオージャが祈りで表明した言葉は、読む者にそのような思いを抱かせるほど、冷徹で厳しいものがあると言わざるを得ない。

だが逆である。アリオージャはこの「絞首台」への道を辿った兄を忘れるどころか、その死後も彼と正面から向き合い続けるであろう。「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」。兄のことを祈りの中でこう表現したアリオージャは、なお師ゾシマ長老の自殺者に関する説教を参照しつつ、この亡き兄について冷静で厳しい考察を続けるのだ。そして亡き兄の内面の葛藤そのものについては直接知り得なくとも、兄の生と死を見据えた思索の見事な結実を、彼自身の編集した「ゾシマ伝」の最終章に記すであろう。我々の最後の作業は、このアリオージャによる「ゾシマ伝」最終章の分析であり、それを土台として、「怒りと裁き」と「愛と赦し」の両極の相貌を以って臨んだ「懼るべき」「活ける神」に対し、死相の現われるほどまでに葛藤を重ねたスメルジャコフが如何に応えたのか、その自殺とは如何に捉えられるべきか、これらについて考えることである。

## (2) 「ゾシマ伝」

### 「ゾシマ伝」との取り組み

アリオージャが「神に召されし苦行修道僧ゾシマ長老の生涯より」、つまり「ゾシマ伝」の編集に本格的に着手した時期について、筆者は何も語らない。詳しい考察は省くが、ここにはアリオージャの家畜追込町における体験の様々な反映も認められる。恐らくアリオージャが「ゾシマ伝」に正面から取り組んだのは、家畜追込町で起きた様々な事件が一段落した後、つまりゾシマ長老とフォードルの死から二か月後、ドミートリイの裁判が終了し、イリューシン少年やスメルジャコフの葬儀と埋葬も終わってから後のことであろう。だがその完成は、それから相当後のことであった可能性が高いように思われる。

と言うのもアリオージャはリーザに対し、自分は二人が結婚する前に、長老の死後直ちに修道院を出て、学業を続け、試験にも合格する必要があると語っている(四四)。それを受けるかのように、それから二か月後、イリューシン少年を埋葬した後の「告別説教」の際、彼は少年たちに向かい、自分はこれから直ちに町を出て、長い間帰らないであろうと告げているのだ(エピローグ3)。家畜追込町を離れ、恐らくは新たに開始された学業生活の中で、アリオージャはゾシマ長老が生前に語った言葉のメモと向き合い、また記憶に残る師の言行を思い起こし、それに家畜追込町に吹き荒れた様々な嵐を重ねつつ、「ゾシマ伝」の編集に取り組んだと考えるのが妥当なところであろう。そしてこの「ゾシマ伝」は人間と世界とその歴史、また神とイエス・キリストについての師ゾシマの言説を土台とし、アリオージャ自身の家畜追込町における体験と考察が織り込まれ、複雑で多層的な構造を持つ小冊子となったのである。そしてこの多層的で奥深い構造そのものが、正にアリオージャが学

業生活に求めたものであり、「ゾシマ伝」とは、アリョーシャが自分自身の愛と信と知を更に深め確かなものとするべく開始した、新たな学業生活から生まれた「初穂」であると言えるであろう。敢えて言えば「第五福音書」とも呼び得るような、この高度に精神性を湛えた「ゾシマ伝」編集の作業が、そう容易に成し遂げられたとは考え難い。我々が以下に見るその最終部分だけでも、アリョーシャが亡き兄スメルジャコフについて続けた思索と祈りの見事な結実である。

この「ゾシマ伝」の成立と福音書の成立との間にある類似性、またそれらにある構造的・内容的な対応の検討、更には「第五福音書」としての「ゾシマ伝」の位置づけという問題。これらは、ゾシマ長老を師とするアリョーシャの思想形成のあり方を明らかにする上で、また広くはドストエフスキイにおけるキリスト教思想を理解する上で、更には書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』後篇の構成と内容を考える上でも、大きな鍵となるものと思われる。福音書の成立に関して、聖書学が積み重ねてきた伝承史的・編集史的分析の作業を中心とした成果に学びつつ、「ゾシマ伝」の成立と正面から取り組むことを、将来の若者たちに心から期待したい。

以下の「ゾシマ伝」最終章についての分析・考察も、その土台作りに向けたささやかな試みである。これを今後「ゾシマ伝」成立の経緯やその構造分析のための、一つの「叩き台」として頂ければ幸いである。なお「第五福音書」としての「ゾシマ伝」については、拙論「ドストエフスキイにおけるイエス像」大貫隆・佐藤研編『イエス伝研究史』、日本基督教団出版局 1998 も参照されたい。

### 「ゾシマ伝」最終章、その構成

「ゾシマ伝」最終章のタイトルは、「地獄と地獄の業火について、神秘的考察」である(六3D)。アリョーシャは亡き師の生涯とその言説を纏めた「ゾシマ伝」の正に最後の最後に、以下で見るように、亡き兄スメルジャコフとの取り組みの総決算とも言うべき一章を置いたのだ。これは死の彼方に走り去った兄スメルジャコフを追って、その内面自体を知り得ぬままに、なお厳しい思索を続けたアリョーシャの愛と認識の探求の報告書であり、また「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」アリョーシャ自身の、死を超えた「永遠の生命」探求の報告書とも言うべき一章である。

我々はこの一章が、以下のような四つの段階で構成・編集されたと考えたい。つまりアリョーシャは「ゾシマ伝」の最終章と取り組むにあたり、まず師が生前に語った「愛」に

関する説教を取り上げて全体を貫く核とし(①)、これに福音書を用いて付加的説明を加え(②、②´)、更にこれに、兄スメルジャコフの自殺について考察をすべく、師の「自殺者論」を接続させ(③)、最後にこれに、彼自身のスメルジャコフの生と死に関する考察を重ねた(④)——以上四つの段階である。

このアリョーシャによる編集作業、言い換えればアリョーシャが織り成したテキストの多層性に注目する時、そこからは彼の師ゾシマ長老の、人間の生と死に関する、そして「神の愛」と「キリストの愛」に関する思想の核心が自ずと浮かび上がるばかりでなく、また師ゾシマの思想に沿いつつ、亡き兄スメルジャコフについて考察を続けるアリョーシャの思考のプロセスも見えてくるであろう。またここからスメルジャコフの思想骨格も、その内部そのものというよりは、アリョーシャの心に映し出された形ではあるが、相当明瞭となるように思われる。更にはスメルジャコフが「悪業への懲罰」によって直面させられた「懼るべき」「活ける神」もまた、ある程度その具体的なリアリティを浮き彫りにすることも期待されるであろう。

### 「ゾシマ伝」最終章、「愛」について、[編集①]

「ゾシマ伝」最終章、冒頭の二行である。

「地獄とは何か？

それは最早二度と愛することが出来ないという苦しみだ」(六三I)

テーマは明確である。「地獄と地獄の業火について、神秘的考察」。タイトルは長くて激しく、そしておどろおどろしい。だが一読して明らかなように、この一章が扱うテーマはただ一つ、「愛」についてである。

続いてアリョーシャは、ゾシマ長老の愛についての教えを詳しく紹介する——この地上に存在するにあたり、人間が与えられたのは「我存す、ゆえに我愛す」と自らに言い得る能力であった。「活きた、実行的な愛」の瞬間が、この地上で人間に「一度だけ、たった一度だけ」与えられたのである。ところが人間が実際にしたこととは、「この上なく貴重な贈り物を拒み、その価値を認めず、愛さず、嘲笑的に一瞥を与え、情け知らずのままに留まる」ことでしかなかったのだ。

アリョーシャは、師ゾシマが日頃人々に説いていた愛の教えを、それに背く人間への非難と警告と共にここに採り入れ、それに重ねる形で、亡き兄と兄に向けられた様々な愛について考えたのであろう。兄の育ての親グレゴリーとその妻マルファの愛、「婚約者」マリアとその母の愛、アリョーシャ自身の愛、そして何よりも「神の愛」と「キリストの愛」——だが兄スメルジャコフは、これら自分に向けられた「愛」という「この上なく貴重な贈り物を拒み」、運命への復讐の鉄槌を下した末に、自らを孤絶の内に閉じ込め、その果てに「己の命を絶滅させて」しまったのだ。

スメルジャコフの自殺直後の祈りにおいて、亡き兄を見つめるアリョーシャの視線は冷静で厳しいものであった。この時兄は「信じていないもの」悪魔の手に自らを委ね、「滅亡した」と捉えられていたのである。この「ゾシマ伝」においても、兄の死を見つめるアリョーシャの視線の厳しさ自体に変わりはない。だが少なくとも二か月以上、相当の時間的懸隔が、アリョーシャの思索に師ゾシマの説教を重ねさせ、その思索の質を祈りの場合よりも一層高め、深めることになったと言えるであろう。つまり彼は兄スメルジャコフを新たに「愛」という視野の下に考察するに至り、この亡き兄が自らに向けられた愛を斥け、自らの命を絶った不幸な人間であるとして捉えるに至ったのだ。「実行的な愛」の人アリョーシャが、家畜追込町の混沌から抜け出て、新たな学業の場で、本来の精神の磁場を取り戻したのだと言うことも出来るであろう。

### 「ラザロと金持ちの譬え」、[編集②]

次にアリョーシャが採り上げるのは、ルカ福音書の「ラザロと金持ちの譬」(十六 19-31)であり、この譬え話に関するゾシマ長老のユニークな解釈である。①で愛を拒んで死んだ人間として捉えられたスメルジャコフは、更に②でもこの延長線上で、師ゾシマの譬え話の解釈の中に捉え直される。つまりここでは、「地上での生活」を愛なくして終わった人間の後悔が、「ラザロと金持ちの譬え」を基に様々に語られるのである。「愛」をテーマとした①に対する②、敷衍の段階と言えよう。

ところでアリョーシャは、ルカ福音書の譬え話を予め十分に紹介することなく、この話を前提とした師ゾシマの説教を提示する。福音書でこの話に触れていない読者には、②の内容は捉え難いものとなる恐れがある。作者ドストエフスキイはこの作品を、例えば我々日本人のような、聖書に馴染みのない異教徒が読むことまで想定はしていなかったであろう。ここではまず、ルカ福音書でこの譬え話を確認しておくことにしよう。

この譬え話の主たる登場人物は金持ちの男と、貧乏人のラザロと、そしてユダヤ民族の父アブラハムである。地上で貧困に喘ぐラザロとは対照的に、金持ちの男は贅沢三昧に耽っていた。男は死んで黄泉に送られ、苦しみ悶える。だが彼が気づくと、あの貧乏人のラザロは今やアブラハムの懐に抱かれ、慰めを与えられているではないか。生前の行いに応じた厳しい報いが黄泉で待つことを知るや、金持ちであった男はアブラハムに、まだ地上にいる兄弟たちの許にラザロを送ってくれるようにと乞い願う。彼は考えたのだ。もし死人から甦ったラザロが警告をしてくれるならば、兄弟たちは生ある今の内に悔い改めらるう。しかしアブラハムは彼の願いを聞き入れない。「もしモーセと預言者<sup>よげんしや</sup>とに聴かずば、たとひ死人の中より甦<sup>しにん</sup>へる<sup>うち</sup>者<sup>よみが</sup>ありとも、其の<sup>もの</sup>勸<sup>そ</sup>を<sup>すすめ</sup>納<sup>い</sup>れざるべし」(十六 31)。この金持ちの

男がそうであったのと同様に、世の人間は誰もが皆、地上で生ある間は、「モーセと預言者」に耳など貸すことなどまずしないのだ・・・

金持ちの男と貧乏人ラザロの対照。地上と天上の生の対照。そして死後、アブラハムの前でのそれら二人の生の逆転 —— この譬え話は普通まず、人間が神に抛るべき生を忘れ、富や私欲に溺れてしまうことへの懼るべき罰を警告する話として捉えられるであろう。だがアリョーシャが紹介したところから判断すると、ゾシマ長老はこの譬えを、地上に生ある間に愛と無縁でいる人間、「活きた、実行的な愛」を斥けてしまう人間たちへの警告として、そして愛への目覚めと立ち帰りを促す譬えとして、日頃人々に語り聞かせていたと考えられる。長老にとって、「モーセと預言者」に耳など貸さないのが人間であり、「神の愛」と「キリストの愛」からの離反とは、人間が全歴史を通して飽くことなく繰り返してきた現実なのだ。ここにいるのは師ゾシマの解釈に即し、「愛」のテーマの下に、亡き兄スメルジャコフを金持ちの男と重ねて思索するアリョーシャであると考えてよいだろう。アリョーシャは兄スメルジャコフの生と死とを福音書の磁場に置き、「神の愛」と「キリストの愛」からの離反の生と死として捉えているのだ。

では「神の愛」と「キリストの愛」から離反してしまった人間の立ち帰りの可能性はどうなるのか。地上で「一度だけ、たった一度だけ」与えられた「活きた、実行的な愛」の機会を拒んだ兄スメルジャコフは、金持ちの男と同じく、またその兄弟たちと同じく、愛なき永遠の「地獄」を運命づけられているのであろうか。この問いに答えるかのように、アリョーシャが続いて記すのは、人を愛することなく死んだ者も、なお天上的な愛に近い愛には触れ得るのだというゾシマ長老の教えである。

ゾシマによれば、自分に向けられた愛に報いることなく死んだ者たちも、天上の<sup>ただしきもの</sup>義人たちの愛を受け容れるに至る時、その従順さと謙虚さの中には、地上で軽蔑した「実行的な愛」の似姿の如きもの、それと似た行為の如きものは認められるであろう —— この部分は地上の生活を愛なくして終えた「金持ちの男とラザロの譬え」②を受けて、ゾシマの愛に関する説教①と繋がる、新たな愛の説教①と位置づけることも可能であろう。この編集の背後にいるのは、既に地上の生命を「絶滅させる」道を選び取ってしまった兄を、その死の彼方にまで追い駆けてゆき、生前兄を包んでいた、そして今も包む愛について、あの金持ちの男が気づいたように兄も気づき、新たにその愛の内に立ち帰る可能性に思いを凝らす「実行的な愛」の人アリョーシャであり、また師ゾシマの教えに抛り、死を超えた「永遠の生命」を探求する「ロシアの小僧っ子」アリョーシャである。

アリョーシャはここから「ゾシマ伝」に大きな転調を施す。①→②→①と「愛」のテーマから、いよいよ③の「自殺者論」へ —— 愛を知らずして死んだ、そして死後に痛切な後悔をした金持ちの男の話を受けて、愛を正面から斥け、自ら進んで死を選び採った不幸な人間、「自殺者」へと話に移されるのである。

### 自殺者への「愛の祈り」【編集③】

以下の③は自殺者に捧げるゾシマの、いわば「愛の祈り」である。

「おお哀れなるかな、地上でわれと我が身を絶滅させてしまった者よ。おお哀れなるかな、自殺者よ！ 我が考えでは、誰もこの者たち以上に不幸な者は最早あり得ないと言えるであろう。彼らのことを神に祈るのは罪であると人は言い、見たところ教会も彼らを斥けているかのようである。だが私は、彼らのためにも祈ることは差し支えあるまいと心の奥底で思っている。と言うのも、愛に対してキリストも怒りはしないであろうから。このような人たちのことを、私は全生涯を通じて心密かに祈ってきた。神父諸兄よ、このことを私は告白する。そう今も日々私は祈っている」(六三I)

繰り返される「おお哀れなるかな」。師ゾシマの祈りに重ねられた、アリョーシャの亡き兄への祈りが漏れ聞こえてくるようである。神とその愛に命を委ねず、己の命を私物化し、自ら己の命を断ち切るといふ、人間が越えてはならない一線の踏み越えをしてしまった「不幸な者」たち。修道院にいた頃アリョーシャは、この「哀れな」「自殺者」たちのためにも、否、彼らのためにこそ捧げられたゾシマ長老の祈りに、そしてその祈りの底にある「神の愛」と「キリストの愛」への長老の信に、心から感動させられていたのであろう。

そのアリョーシャの感動が、師ゾシマの言葉に一つの改変を施した可能性も考えられる。「地上でわれと我が身を絶滅させてしまった者よ」である。彼は師が用いた語、例えば先の④(4)で見た「滅亡してしまおう」(完)や、次の④で見る「根絶させる」(完)などに代えて、敢えて兄スメルジャコフが遺書に記した動詞「絶滅させる」(不完)の完了体を用い、「地上でわれと我が身を絶滅させてしまった者」と刻んだ可能性も考えられるのだ。尤も先の③(4)では、「滅亡してしまおう」と共に「絶滅させてしまおう」も二度用いられている。元々ゾシマ自身が「絶滅させてしまった者」と表現していた可能性も否定は出来ないだろう。いずれにせよアリョーシャは、「絶滅させる」という兄の死にまつわる懼ろしくも悲しい言葉を、「自殺者」に対するゾシマ長老の愛に満ちた説教・祈りと重ね、亡き兄スメルジャコフへの自らの愛の祈りとしたと考えられよう。

### 「ゾシマ伝」最終章、最後の一節、【編集④】

「ゾシマ伝」最終章、最後の一節を取り上げよう。

この一節が、上の引用部分③と共に、主人公たちが用いる「イストレブリャーチ絶滅させる」とその同類の動詞群を扱った際に(本章③(4)、[p.18])、後に取り上げることにしておいた部分である。

「正に地獄にあって、既に論駁の余地なき認識を得ながら、また否定出来ぬ真理を觀照しながら、依然傲慢で残忍な者たちがいる。つまり悪魔とその傲慢な精神に全面的に与した恐るべき者たちがいるのだ。彼らにとって地獄とは、既に己の意志で飽くことなく求める場なのであり、既に彼らは己の好みでなった受難者なのだ。と言うのも彼らは神と生命とを呪うことで、己を呪ったからである。彼ら自ら、まるで飢えた者が荒野で他ならぬ己の体から己自身の血をすすり始めるように、己の憎悪に満ちた傲慢さで己を養っている。だが永遠に飽くことを知らず、赦しを拒み、彼らに呼びかける神を呪うのだ。活ける神を憎悪なくしては觀照できず、活ける神が存在しなくなることを要求し、神が神自身とその全創造物とを根滅させることを要求する。そして彼らは己れの怒りの炎の中で永遠に燃え続け、死と無とを渴望する。だが死を受け取ることはない・・・」(六3I)

『カラマーゾフの兄弟』の中で、またドストエフスキイの全作品中で、これほど激しく「神と生命への呪い」を表現する人物たちが、あるいは「死と無とを渴望する」「恐るべき者」たちが、他に描かれたことがあっただろうか。「活ける神」からの呼びかけも赦しも拒み、逆に「活ける神」が「神自身とその全被造物とを絶滅させる」ことをさえ要求する「傲慢で残忍な」精神。これはイワンが「地質学的変動」で表現した「否定の精神」「倨傲の精神」と匹敵する、否、それを遥かに凌ぐ懼るべき憎悪と呪詛に満ちた精神であり、正に悪魔的「否定の精神」と呼ぶ以外にないであろう。大仰な表現を重ねることになるが、これはドストエフスキイ文学ばかりか、世界の文学・思想・宗教の極北に位置する悪魔的精神と言うべきものであろう。

ゾシマ長老は、神に対して神自身と万人万物一切の死を要求するこのような悪魔的人物たちと出会い、あの「謎の訪問客」ミハイルの場合のように、彼らとの間で生死を賭けた対決を重ねたのであろう。更にゾシマはその相手が、「死と無とを渴望」した末に、遂には自らの命を「根滅させてしまう」という悲劇にも少なからず遭遇してきたに違いない。この師による「自殺者論」を土台とし、アリューシャは亡き兄の生と死と向き合い、思索を続けたと考えられる。「己の意志」や「己の好み」、そして「絶滅させる」。これらの表現はスメルジャコフの遺書とそのまま響き合うものだ。アリューシャは亡き兄の遺書と向き合い、その生と死について師ゾシマの自殺者論と重ねて思索し、「ゾシマ伝」の最後の一節に、自らのスメルジャコフ論を提示するに至ったと考えられる。そしてこのアリューシャの心が最終的に結んだのは、「悪魔とその傲慢な精神に全面的に与した恐るべき者」、「神と生命とを呪うことで、己を呪った」人間というスメルジャコフ像だったのだ。それにしても厳しいスメルジャコフ像である。

上の引用部分に用いられた言葉の中で、スメルジャコフに関する言葉と重なるもの、或いは極めて類似したものが少なくないという

事実は注意すべきである。「己の意志」や「己の好み」や「絶滅させる」、そして「観照」や「傲慢な」等々。その他「呪う」や「拒む」や「憎悪」や「怒り」、更に「神」「悪魔」「地獄」「死」「無」等も全て、スメルジャコフ的磁場の言葉そのものと言えよう。だがこれらが日頃ゾシマ長老の用いた言葉であるのか、アリョーシャがスメルジャコフとの関連で用いた言葉であるのか、この間で如何なる区別が設けられるのかについては、恣意的な判断は許されない。「ゾシマ伝」成立の検討に当たって、今後の課題としよう。

「正に地獄にあつて、既に論駁の余地なき認識を得ながら、また否定出来ぬ真理を観照しながら、依然傲慢で残忍な者たちがいる」——ここに言われる「論駁の余地なき認識を得る」と「否定出来ぬ真理を観照する」、殊に「認識」と「真理」が具体的に何を意味するかは容易には捉え難い。テキストの中から、これらを直接説明する部分を見出すことはまず困難なのだ。物語全体の流れの中から判断する以外にないのだが、ここでは我々は以下のように考えておきたい——まず「論駁の余地なき認識を得る」とは、スメルジャコフが「父親殺し」によって自らの運命への復讐を遂げたものの、それが何ら問題の解決とはならず、むしろ悪魔の奸計に嵌まることでしかなかったとの「認識」に至ったこと。一方「否定出来ぬ真理を観照する」とは、その自分に「怒りと裁き」と「愛と赦し」の両極から「懼るべき」「活ける神」が臨み、自らを含め人間存在が「活ける神の御手」の内にあるという厳然たる「真理」を知るに至ったこと。取り敢えずはこのように受け取っておこう。

### アリョーシャ、その認識の冷徹さと厳しさ

「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で滅亡する」——これはアリョーシャが祈りの中で表現した、自殺直後の兄スメルジャコフ像である。実に的確かつ冷徹で、厳しいスメルジャコフ像と言うべきものである。この祈りから、我々が今見た「ゾシマ伝」最後の一節に至るまで、アリョーシャのスメルジャコフ像は、誤魔化しなく対象を見つめるリアリズムを土台とし、一貫して厳しい。ともするとそれは「自殺者」たる亡き兄についての情け容赦のない批判、痛烈な弾劾とさえ響きかねない。殊に問題は最後の一行である。「だが死を受け取ることはない……」——スメルジャコフは最後の最後で、弟アリョーシャから冷たく突き放されたかのようであり、彼は死を与えられることなく、永遠に「地獄」の内でも苦しみ続けることを宣告されたかのようにならざるを得ない。

### 愛の鎮魂歌

しかしアリョーシャの編集の手順を確認しながら「ゾシマ伝」最後の一章を検討してきた我々には、「だが死を受け取ることはない・・・」というこの最後の一行こそ、亡き兄スメルジャコフに対するアリョーシャの愛の高らかな表明であり、その最後のクライマックスであることは明らかである。兄が「己自身の意志と好みによって」選び取った「地獄」も、そして「受難者」たる地位も決して与えられはしないこと、また「己れの怒りの炎の中で永遠に燃え続け、死と無とを渴望」した兄スメルジャコフに、その「死」も「無」も決して与えられはしないこと、その「怒りの炎」を更に懼るべき炎が焼き尽くし、逆に彼が死を超えた「永遠の生命」に導き入れられること、つまり彼は絶対愛の内に取り込まれていること——「ゾシマ伝」最後の一行とは、このことを兄に伝える最終通告であり、兄スメルジャコフの悲劇的悪魔的な生と死の一切を包み込んで発せられた、アリョーシャによる「告別説教」の締め括りであり、兄への「鎮魂歌」最後の一節と言うべきものである。

### リアリズムを支える愛

「悪業への懲罰」が臨むスメルジャコフの心の内に触れることも、寄り添うことも叶わず、ただ外から心を痛めるしかなかった「実行的な愛」の人アリョーシャ。彼がその「祈り」と「ゾシマ伝」で描き出した二つのスメルジャコフ像は、共に悪魔の「否定の精神」に自らを譲り渡した兄の姿である。それは「憎悪に満ちた傲慢さで己を養い」、「神と生命とを呪うことで、己を呪い」、遂には「憎悪で滅亡」した存在として捉えられ、この上なく厳しい肖像画となったのである。だがそれらは、亡き兄を凝視するアリョーシャが捉えた在りのままの兄の姿であり、そこに誤魔化しの描線は一本たりとも入ることはない。この厳しく的確なリアリズムと、兄に注がれる愛が究極は勝利することへの確信、この二つがアリョーシャをして、兄がかくまでも望んだ「死」も「無」も決して与えられることはないことを宣言させたのだ。第4章に続いて我々がここに認めるのは、「実行的な愛」の人アリョーシャの愛と認識の透徹であり、言葉の真の意味での「強さ」である。

### 「観照者」の運命

ここで筆者がクラムスコイの名画「観照者」と重ねて、スメルジャコフについて論じていたことも思い起こそう（三六、第2章、「研究会便り（9）<sup>[3]</sup>」）。筆者は「観照者」スメルジャコフの未来について、彼が「ことによると放浪と魂の救済のため、突然一切を放棄してエルサレムへと出かけて行ったり」「ことによると突然故郷の村を焼き払ったりすることもあろう」と述べ、更に「場合によってはその両方が一度に起こるということもあり得るだろう」と記していた。今改めて振り返ると、筆者のこの記述は作品の構成上決定的な意味を持つメッセージであり、予告・予言とさえ言うべきものであったことが明らかと

なる。事実筆者の言葉通り、スメルジャコフは「突然故郷の村を焼き払い」「突然一切を放棄してエルサレムへ」と旅立ったのだ。

ここから「ゾシマ伝」最後の一章、最後の一節、最後の一文にもう一度目を向けよう。「だが死を受け取ることはない・・・」。この一文は、筆者が「観照者」スメルジャコフについて述べた予告・予言を受けて、アリョーシャが返した正面からの応答として読まれるべきであろう。ここでアリョーシャは、「故郷の村の焼き払い」と「一切の放棄」を果たした兄スメルジャコフが、自ら赴いた「地獄」の「放浪」の末に、遂には「永遠のエルサレム」に迎え入れられ、「魂の救済」を与えられること、「神の愛」と「キリストの愛」の内に迎えられることを高らかに宣言したのだと言えよう。「罪なくして涙する幼な子」に対する「実行的な愛」。作者ドストエフスキイがこの作品の根底に置いた問題軸・対立軸が、ここにその最終的な解決、対立の究極的解消の可能性を我々の前に示したとも言えるであろう。

### 残された課題

残された最後の課題は、血の一線を踏み越えた直後から「悪業への懲罰」に曝されたスメルジャコフが、果たして如何なる神と出会っていたのか、この問題について考えることである。我々の前にあるのは、アリョーシャの「祈り」と「ゾシマ伝」最終章の検討が明らかにした二つの事実である。まずアリョーシャのリアリズムが、スメルジャコフ像を的確かつ厳しく捉えた見事な質のものであること。そのリアリズムを支える愛が、悲劇的悪魔的生を終えた兄の、死を超えた「永遠の生命」を高らかに宣言する力を持つものであること、これら二つである。このような愛と認識の至上の透徹を以って亡き兄を捉えるに至ったアリョーシャを前に、我々が今更何を言い得るかは疑問である。だがスメルジャコフとアリョーシャ二人を、彼らのイワンとの交流をも含め、共に視野に入れ得る読者としての立場から、我々も残された課題について一言記し、本論を終えることにしたい。

我々はスメルジャコフが直面していたのは、やはり「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」という、相反する両極の相貌を以って臨む「懼るべき」「活ける神」であったと考えたい。血の一線を踏み越えたスメルジャコフは、「懼るべき」「活ける神の御手」二つに捕らえられたのだ。

父フォードルの叩き割られた脳天から噴き出す血は、直ちに彼を「怒りと裁きの神」の前に立たせたのであった。だが懼るべき「悪業への懲罰」が現前する中で、最後の一か月、この殺人者は『シリアの聖イサクの苦行説教集』とも向き合っていたのだ。改めてこの事実は、いくら注意してもし過ぎることではないであろう。スメルジャコフは運命への復讐を遂げて初めて、己の運命がただ理不尽で醜悪なものだったのではなく、愛に満ちたものでもあったことに気づかされたと考えべきであろう。育ての親グレゴリー夫婦、婚約者マリア母娘、そして弟アリョーシャ、これら「親切な人々」が新たな相貌を持って立ち現

れ、これらの人々を向こうに置いて、スメルジャコフは聖イサクの書物を取り上げ、「神の愛」について、そして「キリストの愛」について正面から向き合おうとしたと考えられる。病院にいる時スメルジャコフがイワンに、毎日自分を訪問してくれる「親切な人々」がいることを告げた時とは、同時に彼が「神様」について言及する時であったことも思い起こすべきであろう（第3章<sup>4</sup>、本章<sup>4</sup>）。彼にとり「悪業への懲罰」の現前とは、彼の罪意識を通して臨む「怒りと裁きの神」に加えて、「愛と赦しの神」の現前でもあり、「親切な人々」を介して、スメルジャコフの内では新たに、これら二つの極性を持つ「懼るべき」「活ける神」との直面が始まったと考えるべきであろう。アリョーシャもまた、兄スメルジャコフの心の内に触れることも、寄り添うことも叶わぬまま、この兄の死後、兄の究極の問題が愛の問題であることに焦点を絞るに至ったのは示唆的である。

悲劇は、彼がこれら二つの相反する相貌を以って臨む「懼るべき」「活ける神の御手」の内であって、「己の命を絶滅させる」道を選び採ってしまったことである。「父親殺し」の罪を最終的に自覚させられ、明日の裁判の場に出頭して「告白」をし、「十字架」への道を歩もうとするイワンを目の前にし、スメルジャコフは自らの罪を贖うべく、一気に「絞首台」への階段を駆け上がってしまったのだ。「怒りと裁きの神」、そして「愛と赦しの神」の前に立ちながら、何が彼をして最終的に「怒りと裁きの神」に応えさせ、「己の命を絶滅させる」という選択肢を選び採らせたのか。

### 「傷ついた自尊心」

ここで本章の冒頭に続いて、最後にもう一度彼の遺書に目を向けよう。

「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」

「己自身の意志と好みによって」——冒頭でも見たように、ここにいるのは自ら「己の命を絶滅させる」ことよって、己の罪の一切を贖おうとすると共に、己の「自尊心」の最後の表出を試みようとするスメルジャコフである。彼の内なる「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」はなお疼き続けていたのだ。だがそれは最早、彼の旧き「傷ついた自尊心」の暗い悪魔的表出と考えるべきではないだろう。「己を絶滅させる」ことを彼に命じたのは、他ならぬ彼の「傷ついた自尊心」自身なのだ。ここにあるのは「愛と赦しの神」に触れた「傷ついた自尊心」であり、その中から湧き出てきた自己処罰・自己清算への衝動であろう。しかもそれは「怒りと裁きの神」に重ねての、断固たる「自己聖絶」への意志と言うべきものだ。スメルジャコフにこの選択を迫ったのは、古い衣を脱ぎ捨てつつある「傷ついた自尊心」であり、そこに臨んだ「懼るべき」「活ける神」だったと考えるべきであろう。発狂をも予想され、死相が出るほどまでに憔悴し切り、彼の内で展開していたのは、この「自己聖絶」を巡る最後の葛藤だったと考えて初めて、スメルジャコフに関する様々な謎は、我々の腑に落ちるように思われる。

師イエスを敵に渡したユダは、その師が「死に定められ給ひしを見て悔い」(マタイ二十七3)、自ら首を縊ったのであった。ユダからスメルジャコフへ。自らに向けられた愛を斥け裏切った者たちが、彼らに臨む「懼るべき」「活ける神」を前にして、自らの罪を贖うべく選び採る「自己聖絶」の道。死相が出るほどまでに憔悴し切ったスメルジャコフが一人向き合っていたのもまた、逃げ場なく旧き己の絶滅を迫る神、「怒りと裁き」と「愛と赦し」の両極の相貌を持つ「懼るべき」「活ける神」だったのであろう。猫の葬式遊びにおいて生の終わりを自ら司ろうとしたスメルジャコフ。創世記における光の起源を鋭く衝いたスメルジャコフ。更にはイエスを向こうに置き「私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいかった」と語ったスメルジャコフ——彼は「己の命を絶滅させる」ことで、己の生そのものの始原たる「胎」、万人万物一切の生と死の究極の秘密を司る「懼るべき」「活ける神」の懷に飛び込んでいったのだ。

「己自身の意志と好みによって己を絶滅させる」——これもまた愛に対する新たな裏切りと言うべきであろう。だがスメルジャコフにとっては、自らの最深奥に疼く「傷ついた自尊心」の根を断ち切って「絶滅させる」こと、このことが己に臨む「懼るべき」「活ける神」に応える唯一の道と考えられたのであろう。彼の内なる「自尊心」にはこの時、「愛と赦しの神」に自らを委ねることよりも、自らを「怒りと裁きの神」に重ねること、つまり己の生的一切を一気に「絶滅させる」ことで己の罪的一切を贖うこと、この「絞首台」への道を選び採ることの方が「潔い道」だったのであろう。

自らに臨む「懼るべき」「活ける神」を前にスメルジャコフが採ったこの道は、悲劇的な選択肢でこそあれ、決して悪魔的な選択肢ではない。この選択に対してアリョーシャは冷徹で厳しい眼を向け、兄が自分に向けられた愛を斥けたと見たのであった。彼の判断は正しい。だが同時にアリョーシャは、彼自身「ゾシマ伝」最後の一文で示したように、亡き兄がこの「懼るべき」「活ける神の御手」の内に撰取されることも確信していたのだ。

我々はもう一度、ゾシマ長老がミハイルに示した言葉を挙げて本論の終わりとしよう。

「活ける神の御手に陥るは懼ろしき哉」(ヘブライ人への手紙十 31)

(了)

2018年9月

2019年1月一部加筆修